昭代女子國文

四ヶ年用

巻四

375.9
Ka14
資料室

42408
教科書文庫
4
810
42-1938
20000
42077

375.9
K214

資料室

文部省檢定濟
昭和十三年二月廿二日　高等女學校國語科教科用

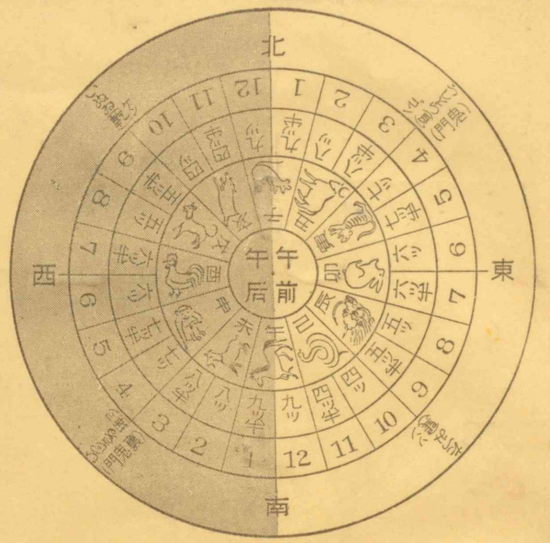
昭代女子國文　卷四

金子彦二郎編

東京　光風館藏版

修正再版

時・方位　五行・干支



五行　水 金 土 火 木

十干　のの とえ　のの とえ　のの とえ　のの とえ　のの とえ

乙甲 癸壬 辛庚 己戊 丁丙 乙甲

十二支　亥戌 酉申 未午 巳辰 卯寅 丑子

丁丙 乙甲 癸壬 辛庚 己戊 丁丙

亥戌 酉申 未午 巳辰 卯寅 丑子

己戊 丁丙 乙甲 癸壬 辛庚 己戊

亥戌 酉申 未午 巳辰 卯寅 丑子

辛庚 己戊 丁丙 乙甲 癸壬 辛庚

亥戌 酉申 未午 巳辰 卯寅 丑子

癸壬 辛庚 己戊 丁丙 乙甲 癸壬

亥戌 酉申 未午 巳辰 卯寅 丑子

1

60

61—甲子

配當表

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 42077 圖書

冬も來ぬれば

貝原益軒

冬も來ぬれば、けさより馴るゝ埋火のもと、やう〳〵立離れ難し。露と霜と置きかはし、もみぢ色濃く、木々の梢、淺茅が原も冬枯の景色となり、おもがはりするも、秋に異るながめなり。神無月の時雨も過ぎて、日暖かなれば、少し春ある心地す。うべ、此の月を小春とぞ言へる。されど一の日二の日、やうやく重なれば、風氣いよ〳〵烈しく、木の葉降りて、山もあらはに見え、殘れる松も峯にさびし。春夏秋の艶なる景色、よそほしかりつるありさま、皆此の時に至りて盡きぬれば、「ことの外にも變れる空かな」と目ぞおどろかれぬる。日頃雪いみじう降りて、嚴めしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色異る有樣なり。冬籠りせし梢の枯れたるも、再び花咲けるが如し。

（樂　訓）

昭代女子國文　卷四

目次

冬も來ぬれば（朗誦文）……貝原益軒……頭巻
一　皇太后陛下の御歌（和歌）……一
二　國の姿を人問はば（和歌）……芳賀矢一……二
三　國歌と國民性……田邊尚雄……五
四　暮鳥詩集より（詩）……山村暮鳥……一五
五　秋を嗅ぐ……西條八十……一九
六　茅渟の海に輝く御親閲……〔東京日日新聞〕……二七
七　月の夜……樋口一葉……三三

第三學期
本式驗

八　運命の集配人……相馬御風…三七
九　空虛の中を秋の車が（手紙）……九條武子…四〇
一〇　食　物……松平樂翁…四三
一一　秋窓雜記……北村透谷…四六
一二　畏し大御心……編　者…五〇
一三　響りん〳〵音りん〳〵（詩）……島崎藤村…五九
一四　ペリコの死……小寺菊子…六四
一五　平家琵琶と二人の武將……湯淺常山…七五
一六　鄕土文學二題……七九
一　鄕土的味覺……吉村冬彥…七九
二　鄕土情調……河井醉茗…九一
一七　直立不動……三宅雄二郎…九六

一八　茶坊主の眞劍勝負……杉浦重剛…一〇〇
一九　仙臺より東京なる妹へ（手紙）……高山樗牛…一〇八
二〇　阿閉掃部……室鳩巢…一一三
二一　スタンプ物語……〔遞信だより〕…一一七
二二　根白たか萱（和歌）……一二五
二三　梅田雲濱の妻……今井邦子…一二九
二四　重圍の中に見る日の丸……小林英生…一三一
二五　正木段之進……橘南谿…一三八
二六　梅花の氣品……豐島與志雄…一四四
二七　百字に映る人生……白鳥省吾…一五二
二八　橘　姫……碧瑠璃園…一六〇
二九　國史に返れ……德富蘇峰…一七

目次終

廣島大學圖書之印

皇太后陛下
御名節子（サダコ）
大正天皇の皇后
明治十七年（西四）六月二十五日御誕生

昭代女子國文　卷四

一　皇太后陛下の御歌

以歌護世

皇神の道の誠をうたひあげて
　榮ゆく御世をいよよ守らむ。

田家雪

里人のいさみきほひて新米を
　納めしくらにゆきぞつもれる。（同　上）

（新萬葉集別卷）

をりにふれて
こと國のいかなるをしへ入り來ても
とかすがやがて大みくにぶり。（新萬葉集別卷）

山色連天

むら山は空のみどりにかよへども
富士のみ白し雪のつもりて。（同　上）

二　國の姿を人問はば

芳賀矢一

たぐひなき國のすがたを人問はば
富士の神山さしてこたへむ。

國つ文國つ言葉を究めてぞ
國つこころは知るべかりける。

外國のふみ見て知りぬ日の本の
くににまされる國はあらじと。

しきしまの大和心を栞にて
よみもてゆかむ外國の史。

さくら木のその下影にうゑてこそ
牡丹薔薇もめづべかりけれ。

まがごとの多くなりゆく世のさまを
直日の大神見なほしたまへ。

敬神卽忠君の心をよめる

現つ神すめ大君に仕ふるぞ

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
昭和二年（一九二七）薨
年六十七

神を敬ふ道にはありける。

櫻

日の本のさくらの花をありとある
　國のはてまで植ゑつづけばや。

大嘗祭

天の下のおほみたからに幸あれと
　神まつります皇大君。

子に

家の神と夫につかへよ國の子と
　子等をそだてよ生けらんかぎり。

（芳賀矢一文集）

三　國歌と國民性

田邊尙雄

田邊尙雄
音樂研究家
東京の人
明治十六年（一八八三）生

マルセーユ曲
行けや祖國の子光榮の日ぞ來れる、我等に對して暴虐の血染の旗は擧げられたり、聞かずや横暴なる兵士は郊野に叫び寄りて、吾等が抱ける子等を屠り妻女を屠らんとす、武裝せよ國民、陣立を作れ進め〳〵（以下略）

一國の音樂が、どれほどその國民に左右されるかと言ふことは、國歌などを見ると最も明かに解る。實に國歌の比較は一面には國々の國體を比較することにもなり、またその國民の氣風・性質などを知るたよりともなる。今試みに、西洋音樂の中心をなしてゐる伊・獨・佛三國について、その國歌を較べて見よう。

最初、まづフランスの國歌マルセーユ曲について考へて見ると、これには貴族的好尙に對する反抗が現はれてゐて、甚だ平民的傾向を帶びてゐる。隨つて國歌の上に尊嚴と

いふものがない。その代り、感情は實に遺憾なく現はれてゐる。一體フランス音樂には、感情の極端な發現といふことが、一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌は實にその尤なものであると言つてよい。この意味に於て、マルセーユ曲は、眞にフランス人民を代表するところの國歌として相應しいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これはすべてフランスと反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性的であつて、徒に感情に走らない、隨つてその音樂も感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來頗る愛國的歌謠が多いが、その愛國心といふ

ドイツの國歌
これは歐洲大戰頃までの國歌をさす

ラインの守り
轟く一聲雷か、劍戟の音か、波濤の音か、ラインに、ドイツのラインに、誰ぞ此の河の防禦者たらんものは、愛する祖國よ、安堵せよ、ラインの守衛は立てり、堅固に且つ忠實に：……（以下略）

ドイツ人の祖國やいづこ
ドイツ人の祖國やいづこ、プロシヤかはたスワヴイヤか、葡萄の實のるラインの岸か、鷗の泳ぐバルチツクの濱か、否々我が國は更に大なるべし

のが、又我が國やイギリス・ロシヤなどと甚だ違つてゐる。

我が國は全然皇室中心主義であつて愛國といふことは皇室を尊重することである。しかるにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得ることを喜ぶと言ふだけの思想から起つた愛國心である。隨つて國歌は皇室尊崇などよりは、他國に對する威壓を以て第一の目的としてゐる。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守り」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國やいづこ」を見ると、實に遺憾なく汎ゼルマン主義を叫んでゐるのが解る。かやうにドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのものが威壓的であるのに反して、フラン

スのものは反抗的である。ドイツのものが理性的であるのに反して、フランスのものは感情的である。實にこの兩者の國歌を見るだけで、歐洲大戰爭の光景が目に見えるやうに感じられる。

飜つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌と言へば、ローヤルマーチ-オヴ-イタリーと稱せられるところの軍歌的の行進曲であつて、歌ではない。これはなかなか面白く愉快に出來てはゐるが、尊嚴といふ感じは少ない。餘り巧みに作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歷史によるのである。イタリーが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か

統一されて云々　イタリーは西紀一八六〇年より一八七〇年の間に統一さる

五十年ほど前である。茲に於てか、始めて國家的觀念と言ふものが急激に勃興して來て、愛國的歌謠が現はれて來た。國歌たるローヤルマーチはこの時に生じたのである。ところが、それに國民の眞情が流露してゐないのは、元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歷史上の變動の爲に急に現はれて來たものだからである。それに、彼等は當時獨立戰爭のために、全國民が一致したところの元氣が卽ち愛國心であると誤解してゐたやうで、國家・皇室の尊嚴と言ふことはその中に入つてゐない。且つ又、イタリーでは從來の音樂が頗る發達して、作曲法の技巧も進んでゐたものだから、國歌が內容よりも寧ろ形式に流れて了

つて、國歌としては餘りに作曲法が上手過ぎてゐる、換言すれば飾り過ぎてある。これはつまり、國歌の成立の精神が、イギリス・ドイツ・ロシヤなどのやうに、古い根柢を持つてゐないで、あまりに新し過ぎるからであらう。イタリーの國歌は、國家が成立した時、あまりに音樂に對する知識が進み過ぎてゐたといふ缺點がある。

この點から見て、日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮内省雅樂部の林廣守氏等の作曲で、比較的新しいものであるのに拘らず、イタリーとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗の旭日の意匠と國歌の「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して

缺一欠

林廣守（はやしひろもり）
雅樂家
大阪の人
長く宮内省雅樂部副長を勤む
明治二十九年（一五六）
歿
年六十六

我が國の威嚴を示す標徴となつてゐると言つてよい。

然らば、如何にして我が國にはかやうな尊嚴な國歌が生ずるに至つたかと言ふに、その成立の動機が根本に於てイタリーと全く相異なるからである。

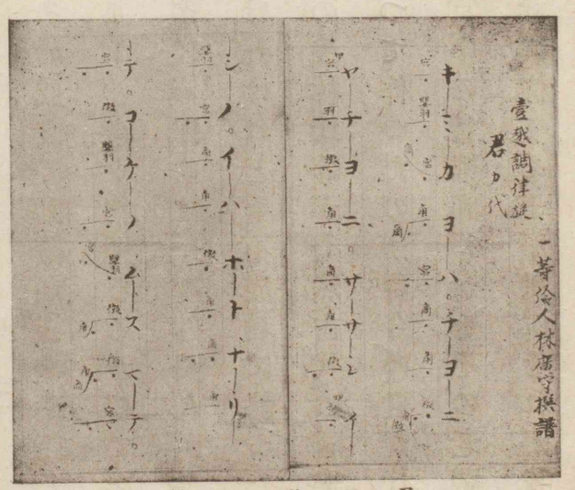
林廣守
林廣修氏藏

「君が代」の作曲は、一度外國人が手を着けたけれども不成功に終つた。その後、林氏等が全然古代の音樂に則つて作つたのが現今の「君が代」である。我が國歌がこんな宮中の音樂師、しかもその老輩の手になつたと言ふのは一寸異樣であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

音樂の歴史

隨—隨

一體我が國上代の音樂は、眞の大和民族の眞情を流露した音樂である。ところが、奈良朝から平安朝の初期へかけて、唐代の形式的音樂、所謂舞樂が輸入されて、爾來その盛んなるにつれて、大和民族本來の性情を具備した音樂は屛息してしまつてゐた。然るに、平安朝の中頃から唐朝が亂れ、隨つて我が國から留學生等を送ることが出來なくなつたので、輸入音樂も勢力を失つ



君が代の譜
宮内省雅樂部藏

久米歌
古昔、久米部が歌ひし歌、故にかく名づく
軍歌と思はるるもの多し
久米舞
久米歌に伴ひ久米氏の舞ひし舞
今は宮中の雅樂の舞となる

てしまひ、こゝに始めて唐朝からの輸入の音樂と、大和民族本來の音樂との調和が行はれるやうになり、かうして終に形式の整つた日本音樂と言ふものになつたのである。

久米舞

元來、古代に於ける大和民族本來の音樂は、大陸的性質を備へてゐたもので、決して島國的のものではなかつた。神武天皇御製の久米歌に基づいた「久米舞」などは、いかにも雄大且つ莊嚴で、現に宮中の饗宴に於てこれを拜する外國

留—笛

の使臣は、皆その結構の偉大に驚歎するといふ事である。かやうに大和民族本來の特性を失はずにそれに最も相應しい形式の與へられた音樂が所謂雅樂である。そして、これを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を備へてゐてしかも形式に於て可なり立派なものであるのは當然なことである。こゝに於て、我が國の國歌とイタリーの國歌と、その成立を全然異にしてゐることも、また隨つてその性質上に多大の相違を生じた理由も、明かに知られるであらう。

（音樂通論）

山村暮鳥
詩人
本名土田八九十
群馬縣の人
大正十三年（一九二四）歿
年四十一

ステーション
停車場

四　暮鳥詩集より

山村暮鳥

感謝

なんといふはやいことだ
たつたいまおきたばかりのところへ
ステーションから箱が一つ
どつしりととどいた
その箱は遠くからいくつもいくつも隧道をくぐ
つてきたのだ
黃金色した大きな穀物畠を橫斷し
威勢のいい急行列車に載せられてきたのだ

そして此の都會のわたしらまできたのだ
みると、箱の裂目からなにかでてゐる
それは葱の新芽だ
それから馬鈴薯と鞘豆と
紫蘇の葉の匂もそこら一ぱいに朝のよろこびを漂はせてゐる。

此の世界のはじめも
こんなであつたか
うすむらさきのもやのはれゆく
海をみろ
此のすきとほつた海の感覺

おお、此の黎明
この世界のはじめもこんなであつたか
さざなみのうちよせるなぎさから
ひろびろとした海にむかつて
一人のとしよつた漁夫がその掌をあはせてゐる
渚につけた千鳥のあしあともはつきりと
けさ海は靜穩である。

人間に與へる詩

そこに太い根がある
これをわすれてゐるからいけないのだ
腕のやうな枝をひつ裂き

葉つぱをふきちらし
頑丈な樹幹をへし曲げるやうな大風の時ですら
まつ暗な地べたの下で
ぐつと踏張つてゐる根があると思へば何でもな
いのだ
それでいいのだ
そこに此の壯麗がある
樹木をみろ
大木をみろ
このどつしりしたところはどうだ。

（現代詩人全集）

西條八十
詩人
早稲田大學教授
東京の人
明治二十五年（一五五二）生

木犀

五　秋を嗅ぐ

西條八十

木犀

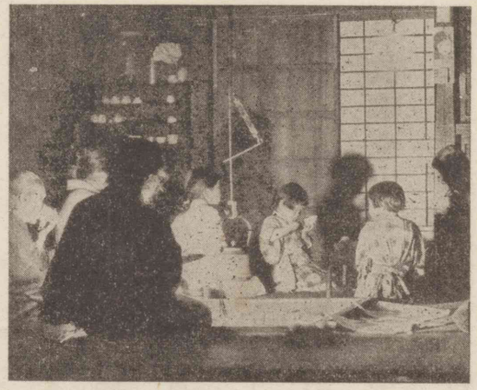
木犀の匂、――あの簇をなした小やかな黄ろい花がたてる香りを、晴れた秋の日の路上などで鼻にすると、わたしは何がなし漂泊者の寂しいこゝろになる。わたしの眼にはうらぶれた一人の漂泊者が見えてくる。

故郷を出でて何十年、日夜望郷の念に燃えながら、生活の波に西へ東へと泛かばされてゐるその旅人が、ふと、路傍の垣根越しにこの花の匂を嗅ぐ。

旅人は立ちどまる。彼の胸には、瞬時、堪へがたく遠い故

郷の村の幻が浮かんでくる。

秋になれば、金色の木犀の花が、背戸に群れ咲く平和な我が家であつた。夕ぐれ、その薫りが鼻に沁むやうに漂ひ入つてくる。ほのぐらい爐邊で、樂しく夕餉に並んでゐた父の顔、母の顔、弟妹のそれを、今、彼は老いて、うらぶれ果てた身で、見も知らぬ都會の路上でしみ〴〵と花の匂のなかに想ひ出してゐるのである。——



爐邊の夕餉

秋の日の木犀の匂が、なぜこんな幻影をわたしに持たせるのか、自分でもわからない。遠い昔、こんな物語でも讀んだ記憶があるのか。それとも東京生れのわたしに、永く相模野に住んでゐた祖先の經驗でも閃いてくるのか。

しかし、秋の日の木犀の花の匂の中に、何か遠いものを想はせる懷かしい感じが籠つてゐるのは事實らしい。これはわたしばかりの感じではないらしく想はれる。

燒栗

燒栗の匂を嗅いで、巴里を想ひ出すのはわたしばかりでは無からう。おそらく巴里の學生町——拉典區（カルテイエ・ラタン）の秋から冬へと生活をした者ならば、あの匂に、こみ上げて來るやうな懷かしさを感ずるに違ひない。

相模　今神奈川縣に入る

荒涼とした巴里の秋。――いや、巴里には秋は無いと言つていい。輝かしい夏が終ると、唐突に暗い冬がやつてくるのだ。公園の空を蔽つてゐた美しい青葉など、日本のやうに漂零の趣など見せないで、バサ〳〵惜氣なく散つて、地上を埋めてしまふ。爽かな秋空なんて藥にしたくも見られない。直ぐにどんよりした古綿のやうな灰色空が一切を押へつける。さうして太陽は午後の三時頃になると殆ど沈んでしまふ。

その日暮ごろ、サン・ミッシェルの橋畔あたり、きれいな火花と佳い薫りを立てて燒栗屋の店が出るのだ。

新聞紙の袋に一フランほど包んでもらつて、わたしは幾

藥―薬

フラン（法）（佛蘭西語）我が國の凡そ三十九錢に當る佛國・白耳義の貨幣の單位

セイヌ河　佛國の北部にあり

ポール・フォール　フランスの詩人象徴派の巨匠

度、夜の欄干に凭れて、セイヌの黑い河水と、遠い星影を眺めながら、この燒栗を貪り喰つたらう。

サンミッシェル橋　有馬生馬筆

寒いけれど、自由な、――淋しいけれど、なほ青春の夢に滿ちたあの頃の夜であつた。

一夜、わたしはサン・ミッシェル街からリュクサンブール公園へ拔ける途角で、詩王ポール・フォールが燒栗を購つてゐるのを見掛けたことがあつた。彼は何時ものやうに、鍔のひろい、黑い天鵞絨の帽子をかぶつてゐた。燒栗屋の爺さん

秋刀魚

浪六　村上浪六　名は信　小説家　大阪府堺の人　明治元年（一八六八）生　當世五人男　小説

一升　一・八リットル

が栗を包む手を待つてゐる彼の半白な髭を、夜風が折々嬲つてゐた。

秋刀魚

秋の日に秋刀魚を燒く匂は、わたしに昔讀んだ浪六の「當世五人男」を想ひ出させる。「五人男」の中に、果して秋刀魚を燒く場面などが在つたかどうか覺えてゐない。ただ、少年時代愛讀したあの小説の中の、黑田とか川上とかいふ意氣に燃える貧乏書生連が、いかにも秋の潮風の吹く砂村あたりで、七輪でこの魚を燒きながら、一升德利を傍に、天下國家を論じ合つてゐたやうな氣がしてならない。從つてこの匂は、自然わたしに、その頃貸本屋から借りて讀んだ「五人男」の、汚れた板紙の古表紙を想ひ起させてくる。

奈良　奈良市

三笠山・鶯の瀧　奈良市の東部

瀧―滝

松茸

松茸の香を嗅ぐと、わたしは奈良を想ふ。わたしが十八九の時代を過したあの古都の周圍には、松茸山が實に多かつた。

三笠の山を三つ越えて鶯の瀧へ出る途、そこらは年中わたしの散歩區域になつてゐたのだが、秋の午後など通ると、妙に松林に注連見たいなものが張つてある。さうしてプンと佳い匂が鼻を掠めてくる。跫音を聽いて、思ひがけない番人の男の鬚面が、暗い林の中から浮き出したりする。都會生れのわたしには、この風景が珍しく面白くてたまら

茸狩　川端龍子筆

なかつた。

高畑の裏手の白毫寺山。――あの麓には當時何とかいふ名の村があつた。太古、埴輪の發明されない以前、殉死を嫌つて遁れた者の子孫で、今になほ周圍から疎んぜられて交際されぬ人たちだと聞かされてゐたが、その村の或家に「ゆき」といふ髪の黑く長い美少女が居た。

わたしは、その少女とよく白毫寺山へ松茸採りに行つたものだつた。三高の受驗に失敗して、わたしはその年の雪降るころ、東京へ歸つたなり、以來逢ひもせずにゐるが、秋になると今でも思ひ出す。

美しかりし彼女も老いたであらう。山上の枯葉を燃し

高畑　春日野の南方の低地

白毫寺山　前頁地圖參照

三高　第三高等學校　京都市にあり

て、よく松茸を燒いて喰はせてくれた彼女の白い手に、いつまでも幸あれかしと、わたしは年毎に祈つてゐる。

（詩を想ふ心）

茅渟の海　和泉國と淡路國との間の海　今の大阪灣

廿九日十一月

トン（噸）　船舶載積噸は百立方呎

六　茅渟の海に輝く御親閲

皇紀正に二千五百九十六年、闌秋の茅渟の海に錦旗飜つて海嘆に輝く廿九日、昭和十一年特別大演習觀艦式は、尊嚴雄渾比ぶべくもなく執り行はれた。太平洋を安きに護る無敵艦隊百八隻、六十萬トン堂々海上を壓して進み、光を遮るばかりの大空軍、凸梯陣をつくつて飛翔するところ、畏くも大元帥陛下には第一線兵力を御親閲遊ばされたのだ。

六甲山　神戸市の東北方に聳ゆ

比叡　戰艦　排水量二六三三〇噸　速力二七節半

永野海相　名は修身　海軍大將　高知縣の人　明治十三年（一八八〇）生

藤田吳鎭守府司令長官　名は尙德　海軍中將　東京府の人

稻垣比叡艦長　名は生起　海軍大佐

洵にこれ、世界海軍無條約時代の備にふさはしい聖代未聞の航進觀艦式であつた。

この日は、あかね雲を仰ぎつゝ山へ、渚へ、沖へ、拜觀所を求めて欣びに急ぐ夥しい赤子の足音を序曲に明け渡つた。見渡せば、海原は蒼々として一塊の浮塵をも止めず、そゝり立つ六甲の連山赤地錦に彩られ、御稜威は六合に照り渡る。

午前七時卅分、陛下には海軍御軍裝に略綬を召され、比叡艦上で、高松宮殿下・閑院宮殿下・伏見軍令部總長宮殿下・伏見宮博義王殿下・賀陽宮恒憲王殿下・久邇宮朝融王殿下・朝香宮鳩彥王殿下・東久邇宮稔彥王殿下の御八方の拜謁に續いて、永野海相・藤田吳鎭守府司令長官・稻垣比叡艦長・廣田首相以下各大臣、御召艦にある勅任官以上の拜觀者、並に本邦駐劄外國大公使館附海軍武官・空軍武官等は、中甲板後部より供奉官の指示によりて、逐次御座所に進み拜謁をたまはる。

廣田首相　名は弘毅　福岡縣の人　明治十一年（一八七八）生

ブイ　浮標

明石市　兵庫縣南東岸

鳥海・愛宕　共に一等巡洋艦　排水量九八五〇噸　速力三三節

足柄　一等巡洋艦　排水量一〇〇〇〇噸　速力三三節

（米）メートル　我が國の三尺三寸に當る

ノット　海里（節）　我が國の十六町余に當る

午前八時五分、比叡は十八番ブイを解纜、第一航路から神戸港外へ進んだ。この頃、港外漸く海霧深く、時々細雨が降るかと見れば、雲を破つて秋陽が輝き、五彩の虹明石沖にかゝる美しさ。すでに港外に待ち奉つた供奉艦鳥海・愛宕・足柄からは殿々たる皇禮砲が發せられ、君が代・登舷禮萬歲の聲が起る。

やがて、鳥海は八百米の前方で御先導申し上げ、御召艦比叡、つゞいて愛宕・足柄の諸艦供奉をもつて海上鹵簿をつく

湯淺內府
內大臣　名は倉平
福島縣の人
明治七年（一八七四）生

松平宮相
名は恒雄
福島縣の人
明治十年（一八七七）生

鈴木侍從長
名は貫太郎
海軍大將
千葉縣の人
慶應三年（一八六七）生

宇佐美武官長
名は興屋（オキイ）
陸軍中將
東京府の人
明治十六年（一八八三）生

淡路
近畿地方西部の島國
兵庫縣の管下

和泉灘
大阪府和泉國の海岸

長門
戰艦
排水量三二七二〇噸
速力二三節

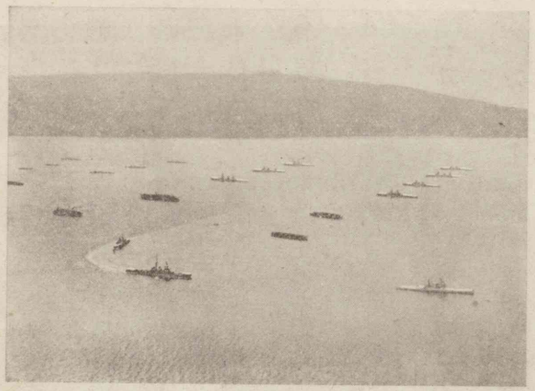
陸奥
戰艦
排水量三三八〇〇噸
速力二三節五

齒—齒

り、御召艦列は八ノットの速力で御親閲場に靜々と進んだ。

午前八時卅五分、艦隊最早間近く迫り、伏見軍令部總長宮殿下は、前艦橋に出御を御奏請、陛下には軍令部總長宮殿下の御先導にて、皇族御七方を初め奉り、湯淺內府・松平宮相・鈴木侍從長・宇佐美武官長・廣田首相・永野海相・藤田吳鎭守府司令長官以下顯官を從へさせられ、御座所より前艦橋玉座に出御あらせられた。「氣をつけ」の喇叭嚠喨と鳴り、軍樂隊は「君が代」一回を吹奏する。

これより先き、淡路東岸に集結してゐた聯合艦隊・第四艦隊は、司令長官高橋三吉大將總指揮の下に、午前七時朝靄たなびく和泉灘にすべり出し、高橋大將の座乘する長門を先頭に、各艦南北六百米の間隔をもつて、五十餘隻の艨艟が平行の縱陣を造り、卅米離れた西には、鹽澤幸一中將座乘の陸奥を先頭に、同じく五十餘隻の艨艟が平行の縱陣で雄大なる大北進を始めた。兩艦列の外側には合計卅七隻の艦船が艦隊列に平行して並んでゐる。



觀艦式

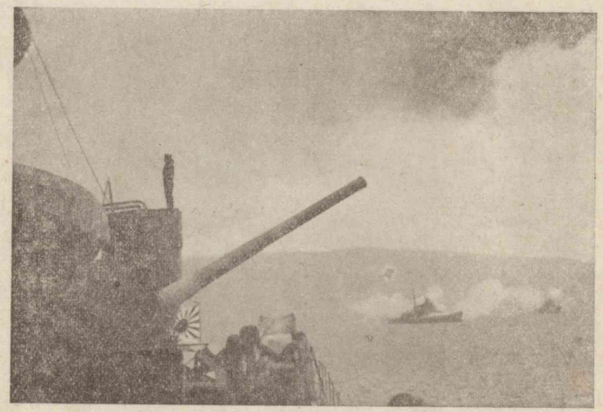
午前八時五十分、大將旗を揭げた長門は御召艦側を通過する。ばっと砲口にむら立つ白煙、齒切れのいゝダーンといふ音、長門の皇禮砲ははじまつた。つ

絹絲草

扶桑
戰艦
排水量二九三三〇噸
速力二二節半

榛名
戰艦
排水量二九三三〇噸
速力二六節

づいて各艦一齊に廿一發を射出せば、甲板上絹絲草のやうにずらりと並んだ登舷禮、君が代の奏樂。長門が過ぎれば扶桑、榛名、西側には陸奥が頭を出し、兩艦列の山の如き威容は肅然進む。



皇禮砲の發射

この時伏見軍令部總長宮殿下には、玉座の傍におはして、參列艦長及び司令以上の指揮官の官氏名等を御奏上、陛下には、一々これを御耳に留めさせられつゝ艦隊を御親閲あらせ

觀—觀

樋口一葉
女流小說家
名は夏
東京の人
明治廿九年(一五五六)歿
年二十五

らる。

續いて十三浬(カイリ)の鴛列航行、これ今次の觀艦式の特徴と言はれる壯絶なる航進觀艦式なのである。折柄、南方から山岳を崩した音響にも似た爆音を立てて、佐藤三郎少將の指揮する航空機の凸梯形が、一群また一群、八十五哩(マイル)の速力で編隊を整へ、御召艦より二百米西側の上空を分列飛翔し、機首を下げて御親閲を仰ぐ。かくて午前九時四十五分、艦隊は通過し終り、海上鹵簿はこの儘くるりと回轉して、艦隊の後を追うて阪神碇泊地へと向つた。

（東京日日新聞）

七月の夜

樋口一葉

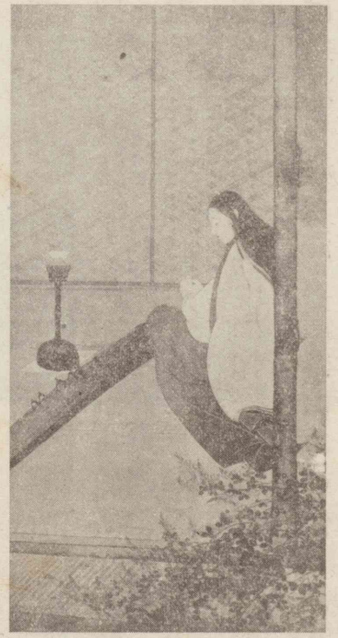
哀感
感懷
感慨

西片町　東京市本郷區内の町名

千里の外まで　三五夜中新月の色。二千里外故人の心。（白樂天）

假―仮

村雲少し有るもよし、無きもよし、磨き立てたるやうの月の影に、尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし。三味も同じこと、琴は西片町あたりの垣根越に聞きたるが、いと良き月に彈く人の影も見まほしく、物語めきて床しかりし。



月光燈影
寺崎廣業筆　野口秀氏藏

親しき友に別れたる頃の月いと慰めがたうも有るかな。千里の外（はか）までと思ひやるに、添ひても行かれぬものなれば、唯羨しうて「これを假に鏡となしたらば、人の影も映るべしや」など果敢なき事さへ思ひ出でらる。

處―処

さゝやかなる庭の、池水に搖られて見ゆる影物いふやうにて、手すりめきたる處に寄りて久しう見入るれば、初めは浮きたるやうなりしも、次第に底ふかく、此の池の深さいくばくとも測られぬ心地に成りて、月は其のそこの底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに、空なる月と水の影と、孰れを誠のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれど、箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゞ波すこし分れてこれにぞ月の影漂ひぬ。

斯くはかなき事して見せつれば、甥なる子の小さきが眞似て、「姉さまのする事我もす」とて、硯の石いつの程に持て出

でつらん。「われもお月さま碎くのなり」とて、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを、身に傳へていと大事と思ひたりしに、果敢なき事にて失ひつる、罪得がましきことと思ふ。「此の池かへさせて」など言へども、未ださながらにてなん。明けぬれば、月は空に還りて名殘も留めぬを、硯はいかさまに成りぬらん。夜な〳〵影や待ちとるらんと憐なり。

嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなどある人の、心安げに訪ひ寄りたる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば如何ばかり嬉しからん。みづから出づるに難からば、文にてもおこせかし。歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には、身にしみて思ふ友とも成りぬべし。大路ゆく辻占賣のこゑ、汽車の笛の遠くひゞきたるも、何とはなしに魂あくがるゝ心地す。（現代日本文學全集）

相馬御風
詩人
評論家
名は昌治
新潟縣の人
明治十六年（一八八三）生

八　運命の集配人

相馬御風

郵便物を配達する人に途中で逢つたりすると、私はよくこんなことを思ふ

「この人は、多くの人間の運命を配達して歩いてゐる神祕な使者だ。あの人の肩からぶらさげてゐる鞄の中には、人生の悲喜哀樂さま〴〵な運命が同居してゐる。

あの人は、それを一つ〳〵配つて歩いてゐるのだ。あの人の鞄の中にある間は、單なる一個の郵便物であり、あの人

にとつては、一刻も早く片附けたい重荷の一部にしか過ぎないが、一旦あの人の手で、それが受取らるべき人の手に渡されると、或ものは涙となり、或ものは怒となり、或ものは笑となり、或ものは赤面となり、或者は絶望となり、或ものは希望の光となり、甚だしきはほんの小さな其の一封の手紙が、人の命をさへ奪ふやうな怖しい效果をもたらしさへもするであらう。だが、さうしたさま〳〵な人々のさまざまな運命を、一つ鞄の中に同居させて、それを肩からぶら〳〵下げてゐるあの人は、どんな氣持でそれをぶら下げたり、配り歩いたりしてゐることであらう。

「神祕なる運命の集配人よ」。

こんなわけで、私はいつか機會があつたら、さうした仕事に從ふ人の誰かに、それを尋ねて見よう〳〵と思つてゐるのだが、いまだにそれをせずにゐる。

封筒の表に「親展」とすらも書いてない一封の手紙の中にも、如何なる人の如何なる運命の鍵が封じ込められてゐるか分らない。そんなことを思つてゐる人が、あのやうな人達の中に幾人あることだらうか。

若しあるとしたら、誰か一つ「郵便配達悲喜劇」と言つたやうな題で、面白い話をしてくれないものかな。――私はそんなことさへ時々考へて見る。

（道限　りなし）

九條武子
女流文學者
大谷光瑞の妹
男爵九條良致の夫人
京都の人
昭和三年（一九二八）歿
年四十二

様—様

九　空虛の中を秋の車が

九條武子

雨かと思ふほど、落葉の音が烈しうなりました。靜岡から御便りを有り難うございます。もう稻は晩稻も刈りつくしましたでせう。野の菊、山の紅葉、この頃の旅は夜は惜しう御座いますが、御忙しい御體ゆゑ、ゆるりとした時間もあらせられませんで御座いましたでせう。木曜日には皆樣相

大谷武子
山川秀峰筆

禮—礼

虛—虛

かはらず御出で遊ばしますことと、御懷かしう思ひやつてをります。

いつも〳〵言うては書かせ、代筆で失禮申上げてをりました。今日はかうして自分で書けるやうになりました。風を引かぬやうとの注意に、今日は雨、また風が吹くとては、一室に御隱居然と火鉢を抱へさせられ、ちと本人迷惑致してをります。障子紙一枚に外界を遮られ、大きな空虛の中を秋の車がから〳〵と狂ひながら廻つてゐるやうな、其の音ばかりをしみ〴〵と聞いて居りますのも、却て寂しさは深う感じられます。

はじめて鏡を見せて貰ひました。櫛にかゝつた落毛、思

はず目が熱うなつて、涙のやうなものが知らず識らずにじんでまゐりました。それはかはいゝ小鳥でもあつたらば、巣にしてやりたい程も御座いました。ほんとにいくら久しぶりでも、つく〴〵病氣は致したく御座いません。つかれた頭でまとまりのつかぬ歌を、それでも毎夜一首二首とかきつけました。そのうち清書いたしまして願ひます。もう大丈夫になりましたから、皆様にもぼつぼつ自分でお便りを申上げられることと嬉しう御座います。かしこ。

（九條武子夫人書翰集）

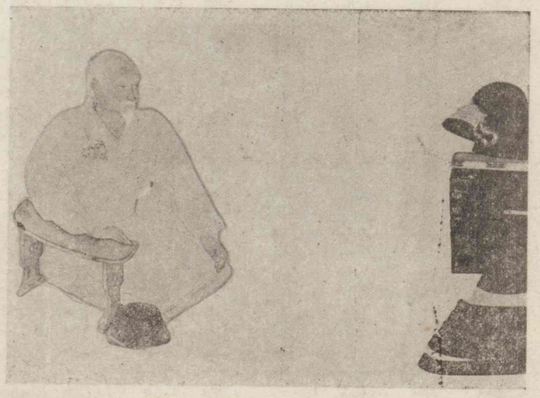
松平樂翁
江戸時代の國學者
奥州白河城主
名は定信
文政十二年（一八二九）歿
年七十二

一〇　食物

松平樂翁

「食は人の天なり」と言ひて、食なければ一日も立ち難きものなり。故に古は食するごとに、先づ食を少しばかり取り分けて、先代飲食を始めし神へ、供へまつりしと言へり。今も僧家には、生飯（サバ）の飯とて、まづ飯を少し取り分ける事あり。又片田舎の野人の、今も食する毎に飯をいたゞきて食するは、古代生飯の遺意ありて、殊勝に覺え侍る。

上天子より下庶人にいたるまで、食なくて立ち難きは同



松平樂翁
前田青邨筆

李紳　唐の武宗の時の宰相
鋤禾の詩　農を憫むと題す

亂—乱

じ事なり。唐の李紳といへる人の詩に「禾を鋤きて日午に當る。汗は滴る禾下の土に。誰か知らん盤中の飧。粒粒皆辛苦なることを」と見えたり。尤も能く土民の苦を知り、飲食の恩を知るといふべし。然るに寢顏のまゝにて、亂髮にて食膳に向ひ、或は平坐して食するは、不敬無禮と言ふべし。殊に高貴の人は、米を一粒選にし、白げにしらげたる飯に、精進日にさへなければ、魚鳥の肉も絶やさず、飽くまで食し給ふは、有難き天地君父の大恩ならずや。粒々皆土民の辛苦なることを思ひ遣り、且つ世には一飯を求めかね、飢餓に及ぶものも幾ばく多き事を察せば、精げ悪しく、魚鳥無しとて、何の不足といふ事か有らん。

蠶—蚕

天智天皇
第三十八代

予も幸に士家に生れぬれば、農家の事は知り侍らねど、老農に問はん便にもと、田作る業のあらましを書き附け侍る。畑作る勞もこれをもて思ひ遣り、高貴の御方は、見もし聞きもし給はざる事多ければ、茲に心ある君は、其の勞を知り給はんとて、農業蠶絲の業を繪に書かしめて、屏風に押して、座右の誡め顧みとし給ふも、昔より多くある事なり。天智天皇の御製に

秋の田のかりほの庵の苫を荒み
わが衣手は露に濡れつつ。

と遊ばしたるは、有難き御事ならずや。

（燈前漫筆）

北村透谷
文學者
名は門太郎
東京の人
明治廿七年(一八九四)歿
年二十七

五情
喜・怒・哀・樂・欲
又は樂の代りに惡を入る

二　秋窓雜記

北村透谷

一

悲しきものは秋なれど、また心地よきものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を醉はしむると、月の人を清ましむるとには、おのづから味ひを異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは、世俗の免るゝ能はざるところながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、居ること僅かに二日。思へらく「この秋こそはこゝに來りて、萬の秋の悲しさを味はん」と。圖らざりき、身事忽忙として、空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。されど秋は鎌倉に限るにあらず、人間到る所に詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道はこれにこそあれ。

野のすすき

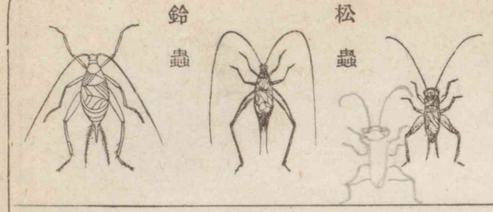
鵯

讀—読

我が庵も亦秋の光景には洩れざりけり。喉鳴き破るばかりの鵯の聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかとうち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず。窓を閉ぢて書を繙けば、一層高く聞ゆなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なれど、秋の聲ぞと聞けば、その面白さ讀書の類にあらず。

四

萩薄我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如くこれらの草花を珍重すること能はず。我は廣漠たる原野に、名も知らぬ花を愛づる心はあれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さほどに嬉しと思ふ情なし。さは言へど、敢て在來の詩人を責むるにはあらず。また自己の



こほろぎ　松蟲　鈴蟲

愛するところを言はんとにもあらず。たゞ我が秋に對する感の一として記すのみ。

五

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、こほろぎの聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に、希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲・鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一こほろぎの爲に我は眠の惜しまれて、物思ひなき心に思ひを宿しけり。

六

芭蕉の葉色、秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、

ゆかしき音の洩れきこゆるに、そが中をうかゞひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を彈ずる面影、凛乎として俗世のものにあらず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず。嬉しきことに思ひぬ。（透谷集）

一三　畏し大御心

一

昭和十一年、陸軍特別大演習御統監の爲、北海道に行幸遊ばされた大元帥陛下が、九月二十七日、釧路驛御着輦の御砌、驛前で特別奉拜の光榮に浴した一女學生があつた。この光榮の少女こそは誰あらう、釧路市立實科高等女學校本科

驛—駅

讀—読

昆布森　釧路國釧路郡の村名

第二學年生徒吉良カヨさん其の人であつたのである。

さて此のうら若い一女學生が、どうして又此のやうな破格な光榮を惠まれたのであらうとは、誰しも聞き知りたく思はずに居られぬところであらう。それには先づ左の壯烈な殉職美談を一讀して見るがよい。

二

吉良平治郎は、大正十一年一月十九日の夜ふけ、北海道釧路郵便局から昆布森郵便局への郵便物遞送に從事し、折からの荒天を冒して出發した。兩局の間は四里ばかりの道であるが、途中で天候が一層險惡となり、遂に暴風雪となつた。雪には慣れてゐる平治郎も、さすがに此の吹雪には困

一里　約四粁

ズック　丈夫なるリンネル

つたが、公の職務を思つて、背負つた郵便行囊に降りかゝる雪を打拂ひ〳〵進んで行つた。

平治郎が釧路から約三里を距てた字宿徳内に通ずる坂路にさしかゝつた頃には暴風雪はいよ〳〵烈しくなり、行く手は見えず、荷物は重し、其の上襲つて來る飢と身を切るやうな寒さに耐へかねて、雪の中によろめき倒れた。しかし郵便物の大切であることを思ふと、又勇氣を振るつて起上り、僅かに寒さを防いでゐたズックの外套を脱いで、郵便物がぬれないやうに行囊を包み、さうして帶を裂いて其の上をしつかりとくゝつた。更に唯一の力としてたづさへて來た竹の杖を傍に立て先端に手拭を結んで目じるしと

町　約一〇九米

從—從

した。それから救助を求めようとして坂下の人家のある方を指して、深い雪の中を歩き出した。しかし、ものの一町も進まない中に、吹雪は全く彼を埋めてしまつた。

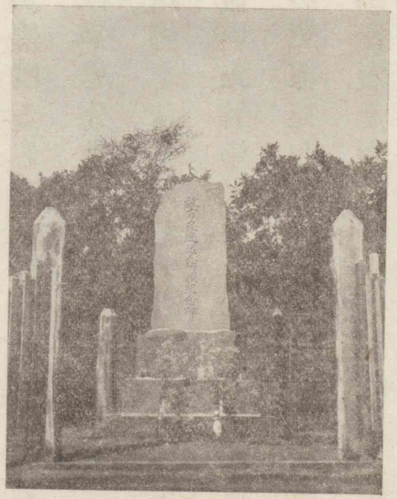
平治郎の行方不明の報が傳はると、附近の青年團員は、郵便局や警察署の人々を助け、手を分けて搜索に從事した。さうして深さ胸に達する積雪を踏分けて、非常な骨折の末、平治郎が目じるしとして置いた竹の杖によつて、雪に蔽はれた行囊を先づ發見し、次いで凍死してゐた平治郎を發見することが出來た。局員が行囊を調べて見ると、少しも異狀なく、檢視に來た人も、青年團員も、平治郎が郵便物を大切にし、細心の注意を拂つた跡をあり〳〵と認めて、其の職責

を重んずる精神の厚いのに感激しない者はなかつた。

（第五十一頁第七行以下高等小學修身書卷一）

三

平治郎の壯烈な最期は、かくして痛く世人を感動させ、其の殉職碑は釧路市外桂戀に建設されて、在りし日の忠實さを永遠に物語つてゐるのであるが、彼の妻も亦數年前に病歿し、殘るは唯一人、可憐な養女のカヨさんのみとなつてしまつた。だが、其のカヨさんが、圖らずも今回、養父生前の功績によつて、



殉職碑

戀―恋

身に餘る光榮に浴したわけで、奉迎者一同、何れも當時を偲び、聖恩の忝さに泣かない者はなかつたと言ふ。況してや當のカヨさんの心中は、果して如何ばかりであつたであらう。それは、まごころを以て綴つた次の感想手記のうちに、いとも鮮かに匂はされてゐる。

感　想

此の度聖上陛下には、畏くも私達の市の學校を行在所として、二晩もおやどり下さいました。私達釧路に住む者にとりまして、この上もない光榮でございます。それのみならず、私ごとき者が、特別奉拜の榮を辱うすることが出來まして、眼のあたり天顏を拜し奉りましたことは、何とも言ひ

表はすことの出來ない喜びでございます。

陛下の廣大無邊な御仁德は、波荒き島の端に生ひそだつ民草の上にまで注がれまして、この度の光榮に浴せしめて下さいましたことは、私一身は申すに及ばず、一家の榮譽これに過ぎるものはございません。さぞ亡き父母の靈も、草葉のかげで破格な天恩に感泣してゐることと存じます。私のこの度の光榮も、ひとへに亡き父の賜なのでございますから、今更ながら、其の大恩に感謝し、いよ〳〵報恩の至誠を盡さねばならぬと決心をかためて居ります。

この海嶽の恩ある亡き父への報恩の道と致しましては、父が一身を獻げて責務を全うしました精神をば、其のまゝ

譽—誉
靈—霊
盡—尽

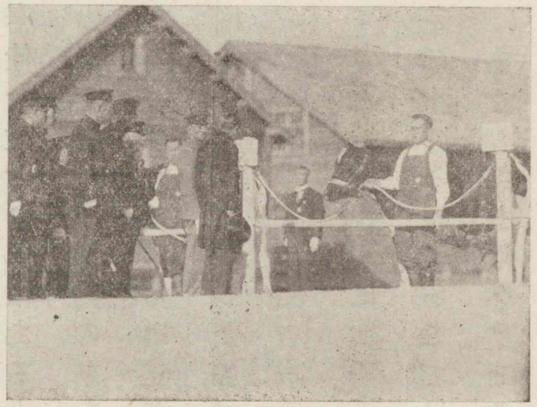
私の行手を照す一生の光と仰ぎ、一天萬乘の君に身命を捧げて忠誠を盡し、又世の爲、人の爲に、女性の力の及ぶ限りの奉仕を致すことにあると存じて居ります。私はあの光榮の二十七日の夜、父の名を汚すやうな子孫となつてはならない、いや父に劣らぬ立派な日本女性にならねばならぬと、固く〳〵心に誓つたのでございます。

四

聖上陛下の御仁慈に富ませ給ふ畏き大御心は、ひとり民草の上のみに留るのではない。物言ふ術知らぬ禽獸の上にまでもあまねく及ぼさせ給ふに至つては、誰か感激の涙に咽ばずに居られよう。謹みて奉揭した挿圖—牛馬の群

圖—図　眞駒内

寫—写



眞駒内種畜場行幸

をも御愛撫せさせ給ふ情景を拜するがいい。圖はこれ、觀兵式賜饌の御儀を最後として、昭和十一年度陸軍特別大演習御行事も滯りなく御終了遊ばされた十月六日、札幌市南郊眞駒内の種畜場へ行幸、澄みきつた秋空のもと、牧歌漂ふ場内をば親しく御巡覽遊ばされた際の謹寫であるが、我等は、最早一言半句の説明の言葉をも要せず、此の、世にも有難く微笑ましき畫面を拜し奉つただけで、自からにして頭のうち下るを覺え、この君、この國のみ榮の、天壤と共に窮りなき所以を直覺させられるのである。さても大御心の畏さよ。

島崎藤村
詩人
文學者
名は春樹
長野縣の人
明治五年（一八七二）生

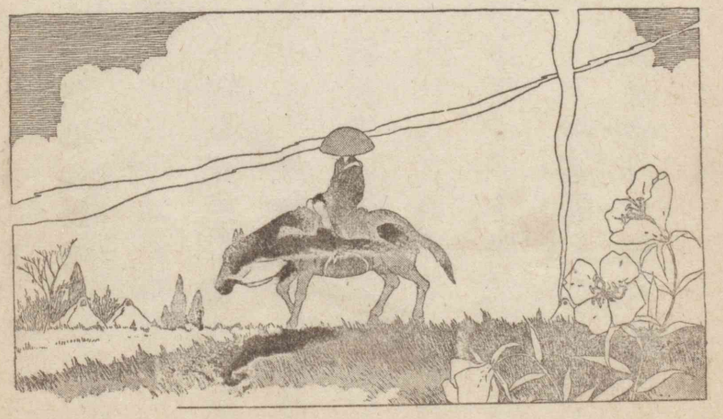
一三　響りん〳〵音りん〳〵

島崎藤村

響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は蹄をふみしめて
故郷の山を出づるとき、
その黑毛なす鬣（たてがみ）は
冷しき風に吹き亂れ、
その紫の兩眼は

青雲遠く望むかな。
枝の緑に袖觸れつ
あやしき鞍に跨りて
馬上に歌ふ一ふしは
げにや遊子の旅の情。

ああ、をさなくて國を出で
東の磯邊西の濱、
さても繫がぬ舟のごと
夢長きこと二十年。
たま〳〵ことし歸りきて、

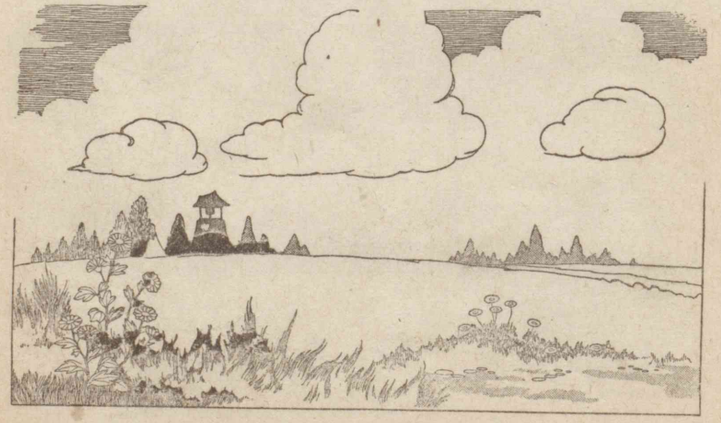


徑―径

蘭　こゝは「ふぢばかま」のこと

檜原　檜の林　長野縣の木曾山中などをさせり

昔懷へばふるさとや
蔭を岡邊に尋ぬれば
松柏すでに折れ碎け、
徑を川邊にもとむれば
野草は深く荒れにけり。
菊は心を驚かし、
蘭は思を傷ましむ。
高きに登り草を藉き、
惆悵として眺むれば、
檜原に迷ふ雲落ちて
涙流れてかぎりなし。



去ね〳〵、かゝる古里は
ふたゝび言ふに足らじかし、
ああ、よしさらばけふよりは
日行き風吹き彩雲の
あやにたなびくかなたをも、
白波高く八百潮の
湧き立ちさわぐかなたをも、
かしこの岡もこの山も、
いづれ心の宿とせば
しげれる谷の野萄葡に

秋のみのりはとるがまま、
深き林の黄葉は
秋の光は履むがまま。

響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く、
馬は首をめぐらして
雲に嘶きいさむとき、
かへりみすれば古里の
檜原は目にも見えにけるかな。

（藤村詩抄）

小寺菊子
文藝家
富山縣の人
明治十七年（一八四四）生

メキシコ
北アメリカ洲南部にある國名

十月二十二日
昭和十一年（一九九六）

一四　ペリコの死

小寺菊子

私の手許に來て、もう九年も可愛がつてゐたメキシコ産の青い小鳥のペリコが、ころりと死んでしまつた。十月二十二日と言へば、ぼか〳〵した秋日和のつゞく頃だのに、その日は夜半から急に冷えて來た。このごろ毎晩仔鼠が大勢出て、やたら暴れるので、私はその夜一時から三時過ぎまでかゝつて、たうとう可愛らしい奴を二疋捕へた。仔鼠はとかく小鳥たちの匂にたかり、あるものは籠の中に入つて餌をたべたりするので、みんな一間に入れてぴつたり戸を閉めて置くのだが、さうすると、その部屋の入口をコツ〳〵噛つて爲方がないのである。だが、今夜はもうこれでいゝと安心して私は眠つてしまつた。

朝になつて小鳥たちを日向へ出してやらうとすると、いつもなら、どんなによく眠つてゐる時でも、私の氣配を感じるやすぐに何とか合圖をする筈のペリコが默つてゐるので、そつとかぶせたきれを外して見ると、何とまあ、あの可愛いペリコが止まり木からおりて、麻の實や粟粒のこぼれた籠底に、しよんぼりと突伏してゐるではないか。私は夢中にペリコを掴み懷へ入れて、はあ〳〵と息をかけ、一生懸命あたためて見たが、もう冷たく堅く突張つてゐて、蘇生つてはくれなかつた。「ペコちやんや、どうして死に〳〵しまし

たか」と、私は胸が込み上げて來た。

夜來の急な冷えで、私があの鼠捕りに夢中になつてゐた頃、小さな指が凍えて、止まり木にも、止まつてゐられなくなり、自分でよち〳〵下へおりて、その儘死んでしまつたのであらう。こんなに冷えるのだから、夜中に一度見舞つてやるべきだつたのを、鼠の騷ぎにかまけて氣が附かずにゐた私の油斷が、取返しのつかぬことになつてしまつたのだと私は悔しい涙がこぼれて爲方がなかつた。

熱帶の小鳥を日本で飼育することは、煖房も持たない我我程度の生活者には、少し無理だらうと、冬の季節に入る毎に何時も思ふのだつたが、ともかく朝夕出來る限り細心な

パン　ポルトガル語パオの訛

バタ　英語バターの訛

注意を拂つて育てて來たのを、慣れると言ふことから起つた私の油斷であつた。私は一時間ばかり子供を喪つた母親のやうに、ペリコの冷たい死骸を抱いたまゝ泣いてゐた。

こんな場合、科學も何にもなかつた。「昨日の晝、私と一緒にそれは毎日習慣で燒いたパンをたべたが、バタをつけ過ぎはしなかつたらうか。水壺が壞れたので、間に合はせに細長い壺を使つてゐたから、もしや嘴が十分水に屆かないで、水不足してゐはしなかつたらうか」と、私は今一度冷たい彼女の首を曲げて、昨日の儘の水壺に突込んでみたが、水は可なり澤山入つてゐるから、飲めないことはなかつた。此度のペリコは二代目で、初代のペリコは今から十八九年前、

メキシコから來たのを、これも友達から貰つて、やはり九年目に亡くしたのも不思議である。

インコは凡て『鳥の人』と言はれるほど、よく人間の言葉や動作や表情を理解し、鳥の中でも、最も利口な鳥とされてゐるが、中でもこの小さなペリコは非常に賢く神經過敏で、私の愛にすつかり甘え、寒い朝は私の寢床で眠つたりしてゐたが、自分に冷淡さうな人や惡口などいふ人だと、籠の傍を通られただけでも氣に入らずキヤッ

インコ　橋本關雪筆

インコ
鸚鵡科の鳥、鸚鵡に似て小さく、種々の色交りて美し
熱帶の產
（下圖參照）

と聲を上げ、人を小馬鹿にしたやうな高慢な表情で怒り、私たちが笑ふと、自分も朗かにから〳〵笑ふ眞似をして、賑かにはしやいだ。ペリコの最も好きなものは、輝かしい日光と溫かい人間の愛とであつた。

私は特に動物好きだとも思つてゐないけれども、みゝと言ふ容色（きりやう）よしの牝猫が十五年も私の手許で生き延びたり、犬も何度か飼はれて、現在も迷ひ犬に情をかけたのが、その儘居据つてゐる。二十年前結婚した時に、私はぞろ〳〵と犬や猫をつれてゐた。動物を可愛がる女は子供を生まないものだと言ふ人がある。それは當にもならない話だが、私は自分に子供が無いからと言つて、人が思ふほど毎日の

生活が寂しい〳〵と常に思つてゐる譯ではないけれども、犬や猫や小鳥を愛すると言ふことで、本當はやつぱり寂しい自分を紛らしてゐるのかも知れない。一歩外へ出れば、忽ち夥しい街の騒音や殺伐な尖り聲や、唖み合ひやを耳にし、然も何らかの政治的社交？を必要とする人と人との交渉の複雑さにぢきに頭が疲れる。

私は家の角まで來ると駈足して歸り「ペコちやん」と呼んで家へ上る。ペリコは私を待つてゐて、疳高な聲で返事をする。この原始的で單純な小鳥への愛情が、如何に私の疲れた心を休ませてくれることか知れない。人間同士の愛憎の念は複雑であつて、燃えるかと思へば又さめる時があるだらう。けれど動物への愛は不變で、しかもだん〳〵と深まるやうに思はれる。激しい社會的條件に人心の怯えきつた今の世に、澄みきつた純一な心で他人を信愛すると言ふことは中々難かしい。だが、動物だけは安心して愛することが出來、彼等の無邪氣な信頼に淡い感激に似たものさへ感じて、疲れた心や感情を、しばし社會の外に息つかせる。「他愛のない感傷だ」と言つてしまへばそれまでのことだけれど、そんな事でも人間は救はれたり、慰められたりするのである。

此度のペリコは九年前の秋横濱の林貞子さんと言ふ未知の婦人が、前のペリコへの私の悲しみを聞いて、わざ〳〵

自分のペリコを贈られたものであるが、私はそれによつて何時か過去のペリコへの愛惜を完全に取り戻すことが出來た。だが、去年の冬、ペリコはとき〴〵止まり木からおりてうづくまつてをり、羽並も少しぼそ〴〵して來たので、一度近所の鳥やに見せたら「老衰」だと言つた。

籠で飼はれる此の種の小鳥の命數はどの位のものか知らないが、メキシコから來て林家に五年、私の家に九年と寒暑の激しい此の日本の地上に十四年も居たペリコは、或は長生きをした方かも知れないと、今は悲しい自分を慰める外ない。ペリコの落ちた夜、信州の旅行から歸つて來た夫は「ペリコ達のお土產」といつて、大きな向日葵の實を一包み、

信州
長野縣信濃國
向日葵

鞄の中から出してくれたが「アリガトツ」と言つて指のあひだに挾んでそれを食べるペリコは、もはや再び嘴をひらかなかつた。

オーケストラ
管絃樂の合奏

輕井澤の夏は小鳥が多く、七月末から八月にかけて、落葉松の林の中に囀る小鳥達のオーケストラを聽いてゐるとほんとに夏の天國を感ずる。あの小鳥達の朗かさを思ふとき、籠で飼はれた小鳥の運命について考へない譯にはゆかない。「自由に空を翔けめぐつて、あるがまゝの自然界に棲息すべき鳥類を、人間

が勝手に捕へて囚徒のやうな生活をさせ、愛玩物として樂しむことの是非を、私は今暗然として考へてゐる。

十日ばかり經つと、ペリコは剝製となつて再び私の手許へ戻つてくる。だが、それは造りものの、枝に止まつて只じつと空間を瞶めてゐるに過ぎない魂のぬけた物體でしかないのである。そして空つぽになつたペリコの鳥籠が、餌壺もその儘秋の陽を浴びて寂しくがらんと殘されてある。人間の空家のやうに、それはしいんと靜まつた祈りに近い寂莫の風景である。

（東京朝日新聞）

湯淺常山
名は元禎
江戸時代の儒者
岡山縣備前國の人
天明元年（一四一）歿
年七十四

輝虎
上杉謙信
戰國時代の武將
天正六年（一三八）越後國春日城に歿す
年四十九

鳥羽院
第七十四代鳥羽天皇
保元元年（一一五六）崩御
寶算五十四

八幡太郎
源義家元服後の通稱
平安朝末期の武將
嘉承元年（一一〇六）歿
年六十八

一五　平家琵琶と二人の武將

湯淺常山

輝虎、或夜石坂撿校に平家を語らせて聞かれけるに、鵺の段を聞きて頻に落涙せられけり。側の者ども怪しみ思ひければ、輝虎の曰く、「吾が國の武德も衰へたりと覺ゆるなり。昔、鳥羽院の御時、禁中に妖怪有りしに、八幡太郎鳴弦して『鎭守府將軍源義家』と名告りければ、妖怪忽ち消えぬ、といへり。其の後

源頼政鵺を射る
高嵩谷筆

頼政　源　頼政
平安朝末期の武人
歌人
治承四年(一八四〇)薨
年七十七
天仁元年
紀元二六六年
近衛院
第七十六代
近衛天皇
仁平三年
紀元八二三年
相州北條
神奈川縣相模國
北條氏
佐野城主天德寺
名は了伯
後豐臣秀吉に仕へ慶
長六年(三六一)歿
佐々木高綱
四郎と稱し、源頼朝
の臣
宇治川
京都府の南部を流る
る川、上流は瀨田川・
下流は淀川なり

頼政鵺を射たれども猶ほ死せずして、井野隼太刺殺して止めたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは天仁元年の事なり。鵺の出でしは近衛院仁平三年なれば、僅かに四十六年なるに、武德既に劣れること遙かなり。今又頼政に後るゝこと四百五十年、我又頼政に劣ること遠かるべければ、覺えず涙の流るゝよ。」とぞ語られける。

相州北條の幕下、佐野城主天德寺勇將なりしが、或時琵琶法師に平家を語らせて聞きけるに、未だ語らぬ先に「我は唯哀なる事を聞き度くこそあれ。其の心得せよ。」と言ひしに、法師「承り候。」とて、佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出でたりしに、天德寺、雨雫と涙を流して泣きたりけり。さて又「今

那須與一
本名宗高
通稱は與一
下野國の人
源　義經の臣

右大將
源　頼朝
蒲冠者
源　範頼
梶原
源太景季

一曲、前の如く哀なる事を聞き度し。」といへば、那須與一が扇の的を語る。半に及びて天德寺また落涙數行に及べり。

後日に、側に仕へし者どもに「過ぎにし日の平家は如何聞きつる。」といふに、皆面白き事に覺え候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて、哀なるかた少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばせられ候。今に不審なる事と申し合ひ候。」といへば、天德寺驚きて「只今までは各を頼もしく思ひ候ひしが、今の一言にて力を落したるぞとよ。先づ佐々木が事をよく心に浮かべて見られ候へ。右大將、舍弟の蒲の冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生唼を、高綱に賜はるにあらずや。其の甲斐も無く、此の馬にて

宇治川の先陣せずして人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじき暇乞ひして出でける。其の志哀ならぬ事かは。」とて、屢〻涙を拭ひつつ、暫しありて言ひけるは「又那須與一も、人多き中より選ばれて、只一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘入れて的に向ふに至る迄、源平兩家鳴りを靜めて之を見物す。『若し討損じなば、味方の名折れたるべし。馬上にて腹搔き切つて海に入らん。』と思ひ定めたる志を察して見られよ。弓箭取る道ほど哀なるものはあらじ。我は毎も戰場に臨みては、高綱・宗高が心にて鎗を取り候ゆゑ、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひ遣り、落涙に堪へざりき。然るに、各〻は哀れに無かりしとや。思ふに、各〻の武邊は、只一

吉村冬彥
理學博士
東京帝國大學教授
文章家
本名　寺田寅彥
高知縣の人
昭和十年（一九三五）歿
年五十八

旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにては無きやと思はれ候。それにては賴もしからず。」と歎きけるとぞ。（常山紀談）

一六　鄕土文學二題

一　鄕土的味覺

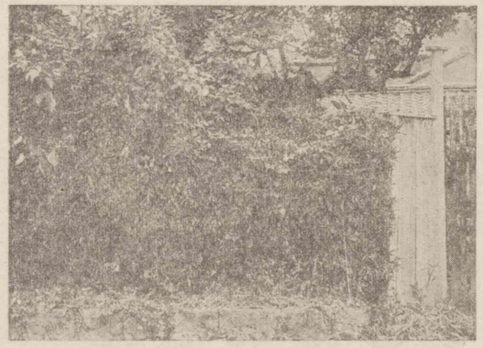
吉村冬彥

日常の環境の中で、餘りに吾々に近く親しい爲に、却て其の存在の價値を意識しなかつたやうなものが、ひと度其の環境を離れ見失つた時になつて、最も强く吾々の追憶を刺戟することが屢〻ある。それで鄕里に居た時には少しも珍しくも何ともなかつたものが、鄕里を離れて他國に移り住んでからは、かへつて最も珍しく懷かしいものになる。さ

寒竹　漢竹ともかく秋より冬にかけて筍を生ず（下圖參照）

隙ー隙

ういふ例は色々ある中にも、最も手近なところで若干の食物が數へられる。その一つは寒竹の筍である。



寒竹の垣根
高知市近傍

高知近傍には寒竹の垣根が多い。隙間なく密生しても活力を失はないといふ特徴がある爲に、垣根の適當な素材として選ばれたのであらう。あれは何月頃であらうか。兎に角薄ら寒い時候に、可愛らしい筍をによき〳〵と簇生させる。引拔くと、きうつ〳〵と小氣味の好い音を出す。軟い綠の莖に紫色の隈取があつて美しい。生で嚙む

鎭臺　明治初期に一地方の鎭守として設けられたる軍隊

虎杖

本町　高知市の略中央を東西に走る大通

と、特徴ある青臭い香がする。年取つた祖母と幼い自分とで、宅の垣根をせゝり歩いてさうけ(笊)に一杯の寒竹を採るのは容易であつた。さうして黑光りのする臺所の板間で、薄暗い石油ランプの燈下で、一つ〳〵皮を剝いて居る。さういふ光景が、一つの古い煤けた油畫の畫面の樣な形をとつて、四十餘年後の記憶の中に浮き上つて來るのである。自分の五歲の頃から五年程の間、熊本鎭臺に赴任した切り一度も歸らなかつた父の留守の寂しさ、恐らく其の當時は自覺しなかつた寂しさが、不思議にも此の燈下の寒竹の記憶と共に、はつきりと意識となつて甦つて來るのである。

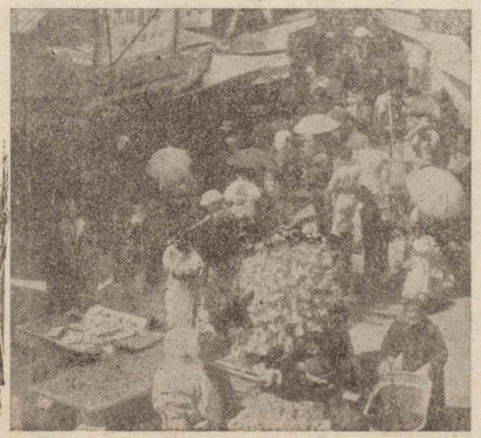
虎杖も懷かしいものの一つである。日曜日の本町の市

肉桂

甘蔗

アトラクション　人の目や心を引くもの

で、手製の牡丹餅などと一緒に此の虎杖を賣つて居る近郷の婆さんなどがあつた。そのせゐか、自分の虎杖の記憶には、幼時の本町市の光景が密接につながつて居る。さうして、肉桂酒・甘蔗・竹羊羹、さう言つたやうなアトラクションと共に、南國の白日に照らし出された本町市の人いきれを思ひ浮べる事が出來る。さうして更にのぞきや、大蛇の見世物を思ひ出すことが出來る。三谷の溪間へ虎杖取りに行つたこともあつた。薄暗い濕つぽい



本町の市

楊梅

我が國の暖地に自生する常綠喬木。高さ約七米に達し、春帶黃紅色の小花を開き後紫赤色の核果を生ず（下圖參照）

楊梅

朽葉の匂のする茂みの奥に、大きな虎杖を見付けて折取る時の喜びは、都會の兒等の夢にも知らない、田園の自然兒にのみ許された幸福であらう。これは決して單なる食慾の問題ではない。純な子供の心は、此の時に完全に大自然の懷に抱かれて乳房をしやぶるのである。

楊梅も國を離れてからは珍しいものの一つになつた。高等學校時代に、夏期休暇で歸省する頃にはもういつも盛りを過ぎて居た。「二三日前までは好いのがあつたのに。」と言ふ場

佐野靜雄
理學博士
東京帝國大學教授

伊豆伊東
靜岡縣伊豆國田方郡
伊東町
伊豆半島の東岸

合が屢々あつた。「お銀がつくつた大もゝは。」といふ賣聲には、色々な鄕土傳說的な追憶も結び附いて居る。それから十市の作さんといふ楊梅賣りの、とぼけたやうで如才のない人物が、昔の我が家の臺所を背景として追想の舞臺に活躍するのである。

大正四・五年頃、今は故人となつた佐野靜雄博士から「伊豆伊東の別莊に試植するから。」と言つて、土佐の楊梅の苗を取寄せることを依賴された。鄕里の父に賴んで、良種を選定し、數本の苗を東京へ送つてもらつた。これが更に佐野博士の手で伊東に送られ、移植された。さうして此の苗の生長を樂しみにして居られた博士は、不幸にして夭折された

のである。亡くなられる少し前に、たしかこれらの楊梅が始めて四つとか五つとかの實をつけたといふ消息を聞いたことがあつたやうに思ふ。其の後更に數年を經過した此の頃、此の楊梅の苗の運命がどうなつて居るか。伊東へ行く機會があつたら、必ず訪ねて見ようと思ふものの一つには、此の楊梅のコロニーがあるのである。

色々な木の實を喰つたことを想ひ出す。昔の高坂橋の南詰に大きな榎樹があつた。橙紅色の丸藥のやうな實の落ち散つたのを拾つて嚙み碎くと、堅い核の中に白い仁があつて、それが特殊な甘味をもつて居るのであつた。此の榎樹から東の方に並んで數本の大きな椋の樹があつた。

椋鳥

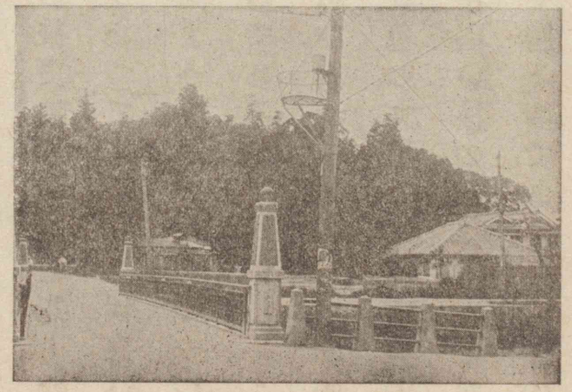
槇

野中兼山　高知縣土佐國の儒者　寛文三年（一六六三）歿年四十九

公園　高知公園　略く市の中央にあり

椋の實は一寸干葡萄のやうな色と味をもつて居る。これが馬糞などと一緒に散らばつて居るのを、平氣で拾つて喰ふのであつた。吾々當時の自然兒には、それが汚いとも何とも思はれなかつた。これらの樹の實を尋ねて飛んで來る椋鳥の大群も、愉快な見ものであつた。「千羽に一羽の毒がある。」と言つて、此の鳥の捕獲を誡めた野中兼山の機智の話を想ひ出す。

公園の御櫻山（おさくらやま）に大きな槇の樹があつて、其の實を拾ひに



高知公園

蒲

菱

舊城　高知城　山内一豐の築城　その城址は今高知公園の中にある

行つた事もあつた。綠色の楕圓形をした喰へない部分があつて、其の頭にこれと同じ位な大きさで、美しい紅色をした甘い團塊が附着して居る。嚙み破ると透明な粘液の絲を引く。これも、國を離れて以來再びめぐり逢はない物の一つである。舊城のお濠の菱の實も、いまの自分には珍しいものになつてしまつた。あの、黑檀で彫刻した鬼の面とでも言つたやうな感じのする外殼を嚙み破ると、中には眞白な果肉があつて、その周圍にはほのかな紫色がにじんで居たやうに覺えて居る。

公園と監獄、卽ち今の刑務所との境界に、昔は濠があつた。其處には蒲や菱が叢生し、さうして吾々が「蝶々蜻蛉」と名附

けて居た珍しい蜻蛉が澤山に飛んで居た。此の蜻蛉は、其の當時でも餘所では餘り見たことがなく、其の後他國では何處でも見なかつた種類のものである。此の濠は餘り人の行かない處であつた。それが自分の夢のやうな記憶の中では、ニムフの棲處とでも言つたやうな、不思議な神祕的な雰圍氣につゝまれて保存されて居るのである。歸省して此の濠のあつた筈の場所を歩いて見ても、一向に想ひ出せないやうな昔の幻影が、却て遠く離れた現在の此處での追憶の中にあり〳〵と浮んで來るのである。

これらの樹の實の記憶には、數限りもない少年時代の生活の思ひ出がつながつて居る。さうしてこれらの自然界

ニムフ　山林水澤の精

來—未

デパート　デパートメントストアの略稱　百貨店

土佐　高知縣

併—併

ローマ　羅馬　伊太利聯邦王國の首府

とつながつて居るものほど、其の思ひ出の現實性が深いやうに思はれるのである。交通の發達につれて、都會と田舍の距離は次第に短縮する。今では大抵な田園の產物も、デパートの陳列棚で見られるのであるが、それでもまだ楊梅や寒竹の筍は見られない。菱や色々な樹の實は土佐に限らぬものであらうが、併し、これらは都會の食味の中に數へられない爲か、何處でも手に入れることが出來ない。さう言ふものが食物になり得るといふことさへ、都會の子供等は夢にも知らないのである。考へて見ると可愛さうなやうな氣がする。

滯歐中の或冬に、伊太利へ遊びに行つた。ローマの大學

ホテル　旅館

刻―刻

を訪ねたとき、物理學教室の入口に竹の一叢を見附けて懷かしい想をした。其の日の夕方、ホテルの食堂で食事のあとに出した果物鉢の數々の果物の中に、唯一つの柿の實が載せられてあつた。同時に食事して居た客の誰よりも眞先きに、自分のところへ此の果物鉢が廻つて來たので、自分は遠慮なく此の唯一つの柿を取上げた。少しはしたない樣な氣はしたが、「天外の孤客だから。」と自分で自分に申譯を言つた。此のローマの宿の一顆の柿の鄕土的味覺は、未だに忘れ難いものの一つである。

味覺の追憶などは、あまり品の好い話ではないやうである。併しそれだけに、原始的・本能的に深刻な眞實性をもつて居る。さうして其の背後には、矢張自分の一生涯の人間生活の記錄が隱されて居るのである。

（續冬彥集）

二　鄕土情調

河井醉茗

おのれ住める鄕は、奧信濃黑姬山のたら〳〵落しの小隅なれば、雪は夏消えて霜は秋降るものから、橘のからたちとなるのみならず、萬木千草上々國より移し植うるに、悉く變ぜざるはなかりけり。

俳局をよくしらべる事、俳局には季節が大切

季節、五月頃

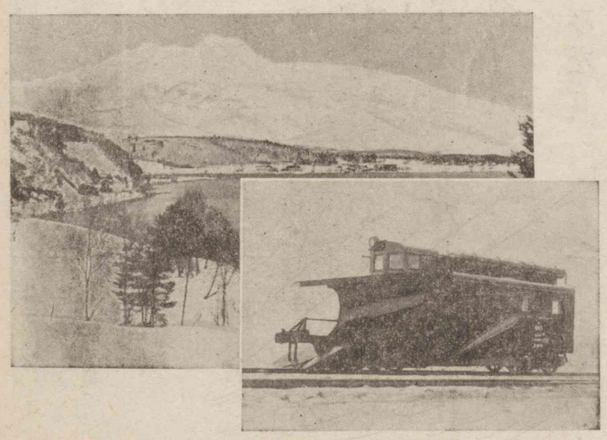
九輪草四五輪草でしまひなり。　一　茶

と一茶も書いたやうに、彼の鄕里柏原といふ村は、もう越後に近い寒村で、冬になると雪が深い。信越線で妙高山の麓

河井醉茗
本名　又平
詩人
大阪府の人
明治七年（一八七四）生
黑姬山
長野縣信濃北部の火山
高さ二〇五三米
一　茶
姓は小林通稱彌太郎
俳諧寺と號す
俳人長野縣の人
文政十一年（一八二八）歿
年六十五
越　後
新潟縣越後國
信越線
こゝは信越本線
高崎新潟間二〇三哩六分
妙高山
新潟縣越後西部の火山
高さ二四四六米

ラッセル
ラッセル式除雪機關車の略
スキー
雪　艇
赤　倉
新潟縣越後西部の溫泉
妙高山の東麓にあり
田　中
長野縣東部の溫泉地
野尻湖
長野縣北部の湖水
黑姫山の東麓にあり

を通つた人は知つてゐるだらうが、昭和時代の今日でも雪の爲に汽車が埋れてラッセル機關車が出動するなど、雪の難所として知られてゐる田口・關山は柏原の直ぐ次々の驛である。冬のスキー、夏の溫泉、赤倉や田中や野尻湖などに遊ぶ現代の都會人には、恐らく想像も出來ない程、交通文化の不便な江戸時代には、荒廢した山村であつたらう。「わが家は丸めた雪のう



ラッセル機關車と妙高山

しろ哉」「降る雪や湧きすててある湯の煙」「五六匹馬干してある枯野かな」など、一茶の句帳を手當り次第に拾ひよみにしても、その鄉土の地方色を語つてゐるのである。

雪溶けて村一ぱいの子供かな。

は、如何にもさういふ村らしい光景ではないか。

雪溶けや貧乏町の痩子たち。

子供らが雪喰ひながら湯治かな。

縄つけて子に引かせけり丸氷。

をさな子や文庫にしまふ初氷。

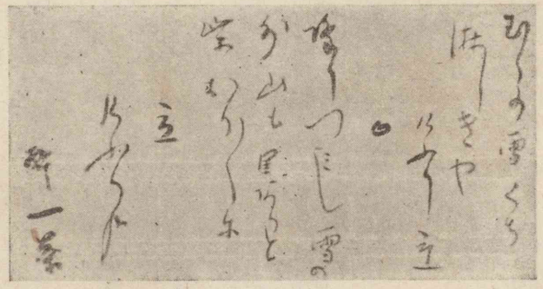
など、子供の生活を如實にうたつてゐる。

梅咲くや犬にまたがる桃太郎。

雪の山里

筆蹟

むらの雪くち、
淋しきやけぶり立
降りつみし雪の
外山も里ありと
柴おり〳〵に
立けぶり哉
醉一茶



一茶筆蹟
一茶同好會舊藏

も可愛らしい。別に梅を桃とし、桃太郎を悪太郎とした句もある。

はづかしや子供も作る雪佛。

「恥じや」は、大人が却て信佛の念の薄いことを慚ぢたので、かういふ山國にも佛教の感化の浸み込んでゐたことが分る。佛教と一茶とは殊に因縁が深かつた。

里の子が犬に附けたる早苗哉。

早苗を稲穂とした句もある。孰れも實景であらう。

一尺　約三十糎

善光寺　長野市にある名刹

信州　長野縣信濃國

子七人さわぐ枯野の小家かな。

七歳の順禮節や夕しぐれ。

大根で叩き合うたる子供かな。

一尺の子があぐらかくゐろり哉。

淡雪にまぶれて騒ぐがきらかな。

子供をがきらと言つてゐるのも、一茶がその時の氣持であつたらう。

僧になる子の美しや芥子の花。

山寺やあす剃るちごの凧。

善光寺を誇とした信州に、僧侶になる子供などの居たこともよく想像されるのである。

（南　窓）

三宅雄二郎
政論家・思想家
文學博士
雪嶺と號す
石川縣金澤の人
萬延元年(一八六〇)生

一七　直立不動

三宅雄二郎

直立不動の姿勢は、緊張を示すに申分ないと言へるけれど、これは片輪か病人かでない以上、誰でも出來ることであつて、寧ろ出來ないのを氣の毒とせずに置けぬ。命令一つで、幾千人幾萬人が卽時に直立不動の姿勢を取つたりする。そこに片輪も病人もない事を證明し、心強く感ずると言へば言へる。命令しても、あちらにもこちらにもヘナ〳〵して屈んだのがあつては、心細い限りとなる。命令一下、見渡す所が鐵壁の如く、切岸の如くなるは、それだけでも、有事の日に强敵を一歩も內に入れず、物の見事に擊退するを察すべきも、さういふ事は例外を除いて何人も練習するに難くない。

姿勢の直立不動は小兒も眞似するを得るとし、精神の直立不動は容易に期待する譯にゆかぬ。横綱が四股を踏んでウンと構へるや、寸分の隙なく、取り的は見たのみで眼が眩んでしまふ。「動かざること山の如し」とは、さういふ姿勢を指さう。然し最屓の旦那の前で猫のやうになるは、精神的に頗る柔かなのでないか。仲間中で爭はぬでなく、打合ひもするけれど、祝儀(シユウギ)次第(シダイ)で幇間の役を勤めるは、到底大事を賴むべき柄でない。直立不動の姿勢を取り得ないのは萬人中の若干、直立不動の精神を體し得るのは萬人中の若

ルーテル（一四八三―一五四六）獨逸の人　耶蘇新教の首唱者

鳥井强右衛門　名は勝商（かつあき）　奥平信昌の家臣　天正三年（一五七五）歿　年三十六

淺野長政　尾張の人　豐臣秀吉に從ふ　慶長十五年（一六一〇）歿　年六十五

干とならう。

「こゝに吾は立つ、吾は他に何をも成すを得ない。」とルーテルが異端を責められ、高官・高僧の前で斷言したとは、史實上疑もあるが、若し事實とすれば、それこそ精神の直立不動とせねばならぬ。鳥井强右衛門が敵軍に捕へられ、「援兵が來ないと言へ。」と迫られ、拔刀の兵に護送されて城下に到り、「援兵が直ぐ來る。」と叫んで殺されたのも、精神の直立不動を明白にしてゐる。淺野長

不動明王

太閤　關白の父なる前關白の稱　こゝは豐臣秀吉

不動明王　五大明王の一　大日如來一切の惡魔を降伏せんが爲、變化して怒りの姿を現し給へるもの　前頁の圖を見よ

勵―励

政が太閤を狐つきと叫び、太閤が怒つて斬らうとしても敢て屈せず、「老人の命は惜しくも御座らぬ。斬つて下さい。」と言つた所、これも精神の直立不動を明白にしてゐる。

不動明王は直立不動の姿勢もあり、直坐不動の姿勢もあり、兎も角も不動たる所は動かないところ、實に姿勢のみでなく精神も不動たるに相違ない。火焔の上る處で泰然自若、動けば繩を以て縛り、尚ほ動けば劍を以て刺すか、解釋は何とあれ、不動明王は不動宗の本尊たるを失はないが、そこへ感心出來ぬ人達が押すな〳〵で押し掛ける所が可笑しい。

直立不動の姿勢を必要とするならば、更に直立不動の精神を奬勵してはどうか。近來轉向することが流行し、右

向け左オイチニで轉向するは、時として已むを得ないにせよ、人間一人前として自ら信ずる所を以て直立し、確乎不動なるのが有難く思はれる。

（初臺雜記）

一八　茶坊主の眞劍勝負

杉浦重剛

幕末の頃、土佐に茶坊主土方某といへるものあり。性磊落にして奇行多く又膽氣あり。士分に列せられて兩刀を帶す。曾て江戸屋敷に在りたる日、或夜出でて、和田倉門外を通過しける折、一人の武士に遭遇す。武士聲をかけて曰く「甚だ突然のことなれども、願はくはわれ御身と眞劍の勝負を決せん。我は所願ありて既に多くの人々と立合ひ、幾

杉浦重剛
教育家
滋賀縣に生る
大正十三年（一九二四）歿
年七十

土佐
高知縣の事

和田倉門
江戸城門の一
麹町區千代田町にあり

十百人を斬りたり。固より辻切を爲すものにあらず。名乘り合ひて勝負するなり。御身の心如何。」言葉靜かにして擧動沈著なり。

土方某は固より劍道を知らず、心中大いに驚くと雖も、左あらぬ體を裝ひて曰く「御身の望む所はわれ之を諾す。然れども、今主命を奉じて使する途中なれば、直に立合を決し難し。御身若し我の主用を果すを待たれんには、われ喜びて勝負を決すべきなり。」と

武士曰く「善し。十分念を入れて主用を果し給へ。われ此處にて待つべし。」と。土方「さらば二た時ばかりを猶豫せられよ。」といひ、再會を約して其の場を去り、急ぎに急ぎて神

神田お玉が池　江戸府内の地名　今の神田區松ヶ枝町あたりにある池の稱

千葉周作　江戸時代の劍客　安政二年（一八五五）歿年六十三

田お玉ヶ池なる劍客千葉周作の門を叩きて、面會を請へり。千葉の門生曰く、「夜分にてもあり、且つ先生不快にて臥床せらる。明朝訪ね給へ。」と。

土方「いや〳〵、明朝を待つこと能はず。急用のため主命を帶びて來れる者なり。是非々々許し給へ。」と逼りぬ。

門生奥へ入り、再び出で來りて曰く、「先生の仰せには、主命とあらば餘儀なし。臥床中なれども苦しからずば御目にかゝるべし。」と。土方「辱し。」とて、伴はれて千葉先生の病床に至る。

先生「主命とは何事なるか。」と問ふ。土方答へて「主命とは僞なり。許し給へ。」と。先生「御身は怪しからぬ振舞せらるるものかな。」と叱責す。土方曰く「僞りたる段は重々御詫を申し上げん。然れども御面會を得ざれば、主命と僞るよりも更に主名を汚すべき大事ありたるが故なれば、先づ一通り御聽き給はれ。」とて、果合ひを挑まれて之を承諾したることの顚末を物語り、「さて御恥しきことなれども、われ未だ劍法を知らず。兎にも角にも討たれて死すべきに覺悟はしつれども、未練なる死に樣して恥を遺し、主名を汚すを恐る。故に來りて先生に見え、見苦しからぬ死をなすの方法を問はんとす。願はくは先生之を教へ給へ。」と。

先生曰く、「珍しきことを聞くものかな。われ幾多の讎討の後見を爲し、或は多く劍法を人に教ふ。如何にして敵に

聽―聽

勝つべきかを問はるゝこと幾度なるを知らず。然れども『如何にして死すべきか。』を問はれたるは今日を始めとす。善し、御身のために語らん。只今の御話によれば、敵は頗る手練ある武士と見ゆ。縱令、御身が今より必死に數年の修行を積みたりとも、決して其の武士に勝つこと能はざるべし。却て御身が劍道を知らざるを利なりとす。御身心して我が言を聞け。彼の武士と相對して互に一刀を拔くや否や御身は直に左足を踏み出して力を込め、大上段に振りかぶりて兩眼を閉づべし。如何なる事ありとも、其の眼を開くこと有るべからず。やゝありて腕か頭か冷やりと感ずることあるべし。これ切られたるなり。其の刹那、御身

大上段
一〇五頁の圖を見よ

遲—遲

も力に任せて上段より切り下すべし。敵も必ず傷き、或は相打ちになるやも知れず。此の事決して背くべからず。」と。

眞劍勝負

土方唯々として拜謝し、一大決心を以て和田倉門外に歸り來れば、彼の武士悠然として待てり。「遲なはりたり。」と挨拶すれば「いや〳〵、意外に早かりし。」と答ふ。愈沈着なる武士の態度なり。いざ、とて雙方立別れ、一刀の鞘を拂ふ。土方此處なりと、魂を丹田に收めて大上段に構へ、

兩眼をひたと閉ぢたり。

武士はやゝ離れたるものの如く、エ、ヤと聲をかく。土方瞑目して石像の如く立てり。心中、今か〳〵と其の斬らるるを待ちたれども、時刻移りて猶ほ無事なり。不思議と思ふ間に「恐れ入つた」と聲す。其の時眼を開き見るに、武士刀を投げて大地に伏す。土方また怪訝の念に堪へず。茫然として語なし。武士曰く「恐れ入つたる御手のうちなり。我等の及ぶ所にあらず。就きては、我が一身如何やうにも處分し給へ」と。

土方曰く「土佐藩の武士は降伏したるものを切るべき刀を所持せざるなり」と。

僞—偽

武士「一命を御助け下さらば、誠に有り難し。願はくは、我を以て御身の弟となし給へ。就きては伺ひ度き儀あり。われ、多年諸國を廻りて數多の劍客と立合ひたるも、未だ御身の如き奇なる流儀を見ず。御身劍道は何流ぞ」

土方、心中可笑しさに堪へず。「否々、何をか隱さん。我は聊かも劍道を知らぬものなり。先刻主用云々と言ひたるは、全く僞なり。實は千葉周作先生を訪ねて、死に方の教訓を受け、先生の言はるゝまゝに爲したるのみ」と微笑しつゝ語れり。

武士曰く「よし劍道を知らざるにもせよ、其の決心を定め得たるは正に劍道の奥儀を會得したるものなり。我が兄

として仰ぐべきなり。」と。

土方「さらば夜更けたるも、千葉周作先生を訪ねて今宵の物語り致さん。連れ立ち給へ。」とて、兩人打ち揃ひて先生の門を叩く。

先生、事の始末を聞き、手を拍つて喜ばれければ、兩人は其の面前に於て兄弟の約を定め、爾後親交渝らざりきとぞ。

（倫理御進講草案）

高山樗牛
評論家
文學博士
名は林次郎
山形縣の人
明治卅年（一八九七）歿
年三十二

一九　仙臺より東京なる妹へ

高山樗牛

この頃はしばしの間の御面會ながら、まことに〳〵御うれしく、又なごり惜しく、今に御身の顔の目のまへにちらつき、朝夕なつかしく存候。たま〳〵逢ひはあひながら、話さんと思ふ十分一も口には出ず、のこり惜しさ、何とも言はん方これ無く候。おもふに、今ごろは無事御着京の上、母上様もろとも所々御見物などなされ候べくと存候。さりながら、百里をへだつる仙臺の地に、朝夕御身をしたひ居る一人の兄あることを御忘れこれ無きやうくれぐれも願ひ申候。

御身と我が身とは何故にかくまで親しみ候や。我等に兄弟七人有れども、まことに〳〵こひしく思ひ候は只良太と御身にて候。此の夏も鶴岡に歸り候ても、御身家にあらざればいかに寂しく候はん。日毎夜毎におなじ蚊

鶴岡
山形縣鶴岡市
樗牛の故郷

爲＝為

帳にあつまりて、御身とわらひたのしむこともはや相成らず。我が身下駄おと高くおとづれ候ても、笑うて我が身を迎ふる人とてはもはやこれ無く、いつもの年ならば喜びいさんで一日も早く歸るやすみも、今年は故郷に御身なき爲いと面白からず、心なにとなくすゝみ申さず候。

思へば〳〵二階の上にて遊びたのしむことも、恐らくは

高山樗牛と生家

新山小路
鶴岡市の町名の一

此の後一生これ有るまじく、我が身御身の生れし故郷の新山小路の家にてはおん身も我を見ざるべく、我が身も御身に逢ふこと出來ずと思ひ居候。かやうなことを思ひ候へば、中々心ぐるしく、夜なぞも眠られず候。

此の度の結婚は御身の爲には何よりの幸福にて、我が身も大いに祝ひ申すところなれば、かくの如きことは言ふまじき事なれども、我が身の悲しみも御身に打明け、推量してもらはんと思ひて、かくはかへらぬ事をめゝしく繰返し申候。平素強情にて、いかなる難儀なることにも困らざる我が身なれども、御身のことを考ふれば、なみだ覺えず顔に流れ申候。

御身もこれまでの御身とちがひ候へば、父母を賴りにせず一人にて身を處するつもりに相成さるべく候。身體は一番大切に御座候へば、平生養生專一に成さるべく候。他鄕にて病氣ほど心細きものこれなく候。九月にも相成候はば、上京面會することを得べく、それのみ樂しみに相待ち居り申候。ひまの折々手紙御送り下されたく、本月十二三日頃までは當地に滯在致し居候。早々。

母上樣、汽車の御さはりこれなく候や、御機嫌御伺ひ下されたく候。萬事へりくだり、長上の言ふこと相守るべく候。

（樗牛全集卷六）

滯—滯

室鳩巢
儒者
名は直清
享保十九年（一七三四）歿
年七十七
三河
今の愛知縣の大半を占むる國
秀康卿
家康の第二子
越前
今の福井縣の大部分を占むる國

二〇　阿閉掃部

室鳩巢

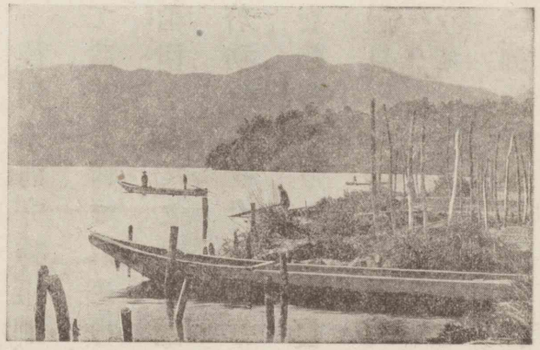
徳川三河守秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて武功のほまれありし者を、厚祿にて召抱へられけり。又狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初せさせけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧着する事を賴みけり。さて饗膳すみ、祝の盃に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の着初にて候まゝ、御身の御武功の事御物語り候うて、かれに御聞かせ候へ。」と言ひしに、掃部「いや、某が身の上に、御話し申すべき程の武功は覺え申さず候。されど御望みもだしがたく候まゝ、某一生の中に武者振の見事なる士

江州賤が嶽
滋賀近江國伊香郡にあり賤が嶽の戰は天正十一年(一五八三)

余吾の湖
同上余吾村の西方南北三・四粁東西四・四粁、賤が嶽は其の南方に聳え、琵琶湖との障壁をなす

を一人見申して候。その事を御話し申すべし。

江州賤が嶽の戰に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵と覺しくて後より詞をかけしゆゑ、馬を引返し候へば、其の人申し候は、『今朝よりかせぎ候へども、よき敵に會ひ申さず候。御人體を見受け、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべし。』とて、進みより候故、『それこそ此方も望む所にて候へ。』とて、互に馬を乘り放し、既に槍をあはせんとしけるに、其の人、『暫し御待ち候へ。


余吾の湖

負—負

今朝より雜兵を多く突き崩し候故、槍よごれ候まゝ、槍を洗ひ候うて御相手になり候はん。』とて、余吾の湖に槍をうちひたし、二三遍洗ひつゝ、『さらば。』とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れ果てて物のあやめも見えずなりぬ。其の時あなたより詞をかけ、『最早槍先きも見えず候。御殘り多くは候へどもこれまでにて候。御暇申候べし。御名こそ承りたく候。某は青木新兵衛と申す者にて候。』とて某が名をも承り候うて、『此の後、又陣頭にて出で會ひ候はば、互に人手には懸り申すまじく候。若し又味方にて候はば、わりなき入魂致し候ふべし。さらば。』とてたち別れしが、これ程見事なる武士は遂に見侍らず。いかがなり果て候ふに

齋—斎

雙—双

や」と語りけり。

其の頃、伊勢が許へ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。其の日も來りて勝手に居たりしが、此の物語を聞きて、勝手よりにじり出でつゝ掃部に向ひて「さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、恥かしながら我等にて候。かく申すばかりにては、うきたる事に思すべく候」とて、其の時雙方の鎧の縅・馬の毛色を一々いひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きつゝ「さて〳〵、久しくて逢ひ候うて本望に候」とて、手前にありし盃を方齋にさし、是をしるしにとて、腰の脇差を抜きて引きける。

それより方齋が名、國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出されけりとぞ。

（駿臺雜話卷三）

康正元年
紀元二一一五年
太田道灌
名は持資
入道して道灌といふ
上杉定正の臣
文明十八年（一四八六）歿
年五十五

稱—称

二一　スタンプ物語

宮城

宮城は康正元年太田道灌の築工に係る。明治二年奠都のことあり。こゝを皇居と定めらる。東京正門二重橋は、もと西丸下乘橋と稱へた木橋であつたが、後鐵橋に改築せられた。橋畔より御濠を隔てて遙かに拜し得る

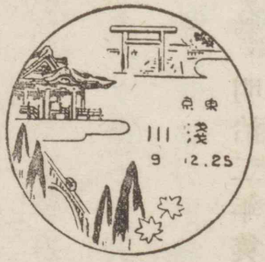
大正天皇　第百二十三代
横山村　東京府南多摩郡
淺　川　東京府を横斷する多摩川の上流
高尾山　東京府南多摩郡にある山　高さ約六〇二米
聖武天皇　第四十五代
行基菩薩　奈良朝時代に出たる法相宗の高僧　天平勝寶元年（一四〇九）寂　年八十
ケーブルカー　鋼索鐵道上を運轉する客車・貨車

瓦甍は、拜觀者をして自から恐懼跪坐せしむるものがある。

多摩御陵

大正天皇の多摩御陵は横山村にある。御陵は東南に面し、上圓・下方の形式は、桃山御陵と同樣に拜せられる。御陵は三方に丘陵を繞らし、傍を淺川が流れてゐる。御陵の西南高尾山には、新義眞言宗の藥王院有喜寺がある。

天平十六年、聖武天皇の勅願に依り、行基菩薩の創建と言はれる古刹で、頂上に十二州見晴臺の勝地がある。圖は多摩御陵と藥王院本堂とケーブルカー。



淺　川

鶴岡八幡宮

鎌　倉　神奈川縣鎌倉郡にある町　建久三年（一八五二）源頼朝こゝに幕府を開く
鶴岡八幡宮　鎌倉町雪の下に鎭座する國幣中社
靜御前　源義經の妾
身延山久遠寺　山梨縣甲斐國南巨摩郡にあり
波木井六郎實長　甲斐國波木井の邑主　後日蓮の門に入り日圓といふ
日　蓮　鎌倉時代の高僧　法華宗を創む　千葉縣安房の人　弘安五年（一九四二）歿　年六十一

鎌倉は、今から約七五〇年前、源頼朝が平氏を亡ぼして幕府を開き、約百五十年の間、武家政治の中心として、所謂鎌倉時代文化を築いた地である。圖は鶴岡八幡宮に大公孫樹と靜御前の舞姿。

鎌　倉

身延山

日蓮宗總本山身延山久遠寺の祖師堂。文永十一年、豪族波木井六郎實長が、日蓮の爲に身延山を獻じて招請したのに創り、弘安四年、實長は更に大伽藍を建立して久遠寺と號した。山内には祖師堂・眞骨堂・釋迦堂・位牌

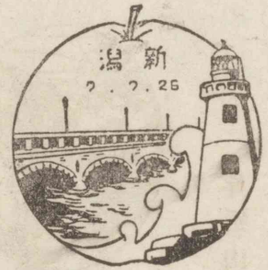
身　延　山

五港
我が國最初の開港場
横濱・神戸・長崎・
新潟・函館の稱

堂・大客殿・書院等三十有餘の坊院がある。圖の外郭は日蓮宗紋章の一部を表はしたものである。

新潟港

新潟は信濃川の兩岸に發達した港市で、市内には溝渠が縦横に通じ、水運の便がよく、且つ水邊の柳は「柳の都」と呼ばせる程ゆたかな風情を添へてゐる。



新潟

永く五港の一として謳はれ、現に北陸の門戸である。民謡佐渡おけさ・新潟甚句・越後追分と共に有名なるのみならず、近代産業の都市としても亦著しいものがある。圖は、信濃川に架する萬代橋及び新潟港頭の燈臺に波を配し、輪郭は

芭蕉
江戸時代に出た俳諧の大家
元祿七年(一六九四)歿年五十一

松島
宮城縣松浦灣の内外に散布する大小百有餘の島々及び灣岸一帶の景勝地
「松島は……」
芭蕉の奥の細道の一節

土地の名産たる梨を象る。

松島

芭蕉は松島に遊んで「松島やあゝ松島や松島や」の名句を生んだ。又「松島は扶桑第一の好風にして……島々の數を盡くして、欹つものは天を指し、伏するものは波に匍匐ふ。或は二重に重なり、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃かに、枝葉潮風に撓めて、屈曲自から矯めたるが如し」などとも稱へてゐる。圖は松島五大堂と帆。

松島

養老瀧

源丞内
第二十一代雄略天皇の御代の人、傳不詳

養老の瀧
岐阜縣養老郡にある養老山脈東側の山腹に位し、高さ三〇餘米、幅四米餘

犬山城
愛知縣丹波郡犬山町丘上の城址
日本八景の一

金華山
岐阜市の東北稻葉山の最高峰
海拔約三三六米
北側は長良川に臨み山頂に岐阜城址あり

「瀑水變じて美酒と化した孝子源丞内の傳説に名高い養老の瀧は、養老公園の奥まつた所にある。高さ約三十米、春は櫻、秋は紅葉、四季折々の眺めが良い。圖は瀧の傳説に因む瓢箪と薪とを配したものである。

養老

犬山

犬山城は外觀三層、内部五層より成り、木曾川の清流に臨む名城である。天守閣に登れば、直下の木曾川の流に帆舟の悠々たるを隔てて、信濃の翠巒が屏風の如く連なり、西方には夕暮富士を隔てて、岐阜の金華山・伊吹

犬山

伊吹連山
滋賀縣と岐阜縣との堺にある伊吹山を中心とする連峰

瑞泉寺
犬山町の東北木曾川の岸崖にあり
應永廿二年(一四一五)妙心寺白峰和尚の開基

松阪
三重縣松阪市
參宮線の一驛

天正六年
紀元二二三八年

蒲生氏郷
織田信長・豐臣秀吉に仕へたる武將
會津百萬石を領す
文祿四年(一五九五)歿
年四十

本居宣長
國學四大人の一人
賀茂眞淵の門人
享和元年(一八〇一)歿
年七十二

連山を望み、東方には臨濟宗本山瑞泉寺の丹塗の殿堂が隱見し、更に南面すれば、尾張平野が遠く展けて寸眸の裡にある。圖は犬山城と木曾川の帆舟。

松阪

松阪城址及び櫻の花瓣内に本居宣長自畫像を配し、輪郭を翁遺愛の鈴に象つたものである。松阪城は、天正六年蒲生氏郷の築いたものであるが、今は唯石垣を殘すのみである。本居宣長は、伊勢松阪の生んだ有名な國學者で、古事記傳を初め數十部の著書は、實に此の地で執筆せられたものである。宣長翁は鈴を愛すること深く其

松阪

延元元年
紀元一九九六年
楠木正成
後醍醐天皇時代の忠臣
延元元年（九九六）湊川に戰死
年四十三
獅子は子を
「獅子子を産んで三日を經る時數千丈の石壁より是を擲ぐ。其の子獅子の機分あれば、敢へざるに中より跳返りて死する事を得ずといへり云々」（太平記卷十六）

の居屋を「鈴の屋」と稱した。三十六の小鈴を赤き緒にて貫き垂れたのを机の傍に懸け、氣の結ぼほれる折には、これを振つて其の音を樂しんだと言ふ。

櫻井の驛

延元元年五月十六日、楠木正成が一族郎黨數百騎を率ゐて兵庫へ下る時、これが最後の合戰と思ひ、十一歳の嫡子正行を陣營に招いて、かの有名な「獅子は子を生めば三日にして云々」の遺訓を與へ、河内に送還した悲痛壯烈なる櫻井驛訣別の一場景は、後の人をしてどんなにか心血を湧かしめたことであらう。圖は父子訣別の圖と、乃

櫻井の驛

乃木大將
陸軍大將伯爵
大正元年（一九一二）殉死、
年六十四

賀茂眞淵
國學者
靜岡縣遠江國の人
明和六年（一七六九）歿
年七十三

筆蹟
夏日
渡の原豐榮登朝日子の、御影恐き六月の空　眞淵

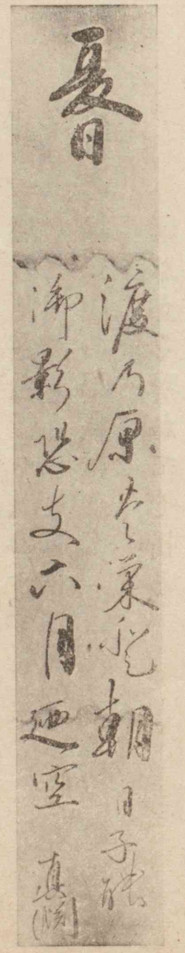
木大將染筆の大記念碑。

（遞信だより）

二二　根白たか萱

賀茂眞淵

大魚（おほな）釣る相模の海の夕なぎに
亂れていづる海士小舟かも。



信濃なる菅（すが）の荒野を飛ぶ鷲の
翼もたわに吹く嵐かな。

田安宗武
國學者
八代將軍德川吉宗の第三子
明和八年（一四三）歿
年五十七

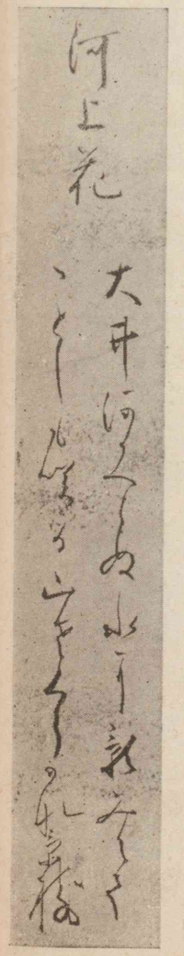
足引の岩間をしぬぎわく水の
落ちたぎち行く風のすずしさ。

わか草の綠が中の早蕨は
紫ふかく尋ねてぞ折る。

香川景樹
國學者　歌人
鳥取の人
天保十四年（一五〇三）歿
年七十六

ちちこ草母子草おふる野邊に來て
昔こひしくなりにけるかな。

筆蹟
河上花
大井川かへらぬ水に影みえてことしも咲ける山ざくらかな
景樹



橘曙覽
姓は井手ともいふ
福井の人
明治元年（一三六八）歿
年五十七

河岸の根白たか萱風吹けば
浪さへ寄せて涼しきものを。

すくすくと生ひ立つ麥に腹すりて
つばめ飛び來る春のやま畑。

たのしみは、戎夷よろこぶ世の中に
皇國忘れぬ人を見るとき。

平賀元義
幕末の歌人
岡山藩士
慶應元年（一三六五）歿
年六十六
麥飯の山
岡山縣兒島郡
加佐米の山
岡山縣備中と備前の境

牛飼の子らにくはせと天地の
かみの盛りおける麥飯の山。

大君の加佐米の山のつむじ風

僧　良寛
江戸時代の歌僧
俗名　山本榮藏
新潟縣越後國の人
天保二年（一八三一）寂
年七十四

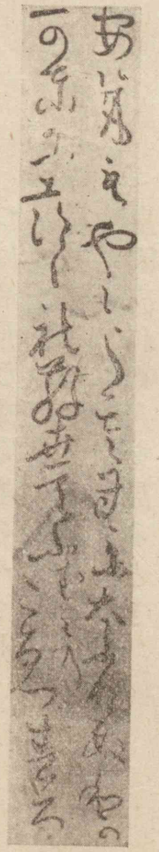
筆　蹟
あきもやゝよきむに
なりぬわがかどに、
つゞれさせてふむし
のこゑする

楫取魚彦
國學者
千葉縣下總國の人
天明二年（一七八二）歿
年六十

益荒たけをが笠ふり放つ。

僧　良寛

たらちねの母がみ國と朝夕に
佐渡が島べをうち見つるかな。



良寛筆蹟
新潟縣解良淳二郎藏

月讀のひかりを待ちて歸りませ
山路は栗のいがの多きに。

楫取魚彦

雲を
天の原吹きすさみたる秋風に

今井邦子
歌　人
長野縣の人
明治廿三年（一八五〇）生

梅田源次郎
雲濱と號す
幕末の志士
福井縣若狹の人
安政六年（一八五九）歿
年四十五

走る雲あればたゆたふ雲あり。

國を詠ず

大汝少彦名のつくらしし
大八洲國は廣らに厚らに。

二三　梅田雲濱の妻

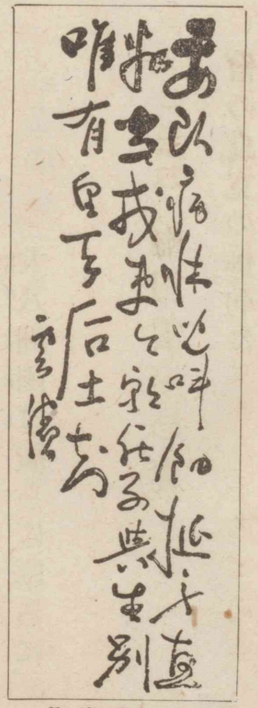
今井邦子

僧の良寛の俳句に
焚くほどは風がもてくる落葉かな。
と言ふのがある。出家脫俗の生涯に在つて、如何にも自然の內に生息してゐる者の無慾淸淨な生活を偲ばしめて尊い。この句を思ふ毎に、必ず私に思ひ出されるのは梅田源

次郎雲濱の妻某の歌である。

　　樵りおきし軒のつま木も焚きはてて
　　拾ふ木の葉の積る間ぞなき。

の一首である。雲濱の妻は、當時の女流歌人でも何でもなかつた。唯武家の娘としてたしなみに歌の詠み方を習うてゐた程度に止まるのである。然し、夫源次郎が安政年間に尊王攘夷論をとなへ獄に下される等、國事に奔走して家をかへりみなかつたにも拘らず、強く凛々しく子供をかへて、赤貧のどん底に生活と戰つて生きぬいた。「拾ふ木の葉の積る間ぞなき」の一句は、その生活を語る一切の代言である。心ある者、之を讀んで涙せざるはないと思ふ。



梅田雲濱筆

筆蹟
妻は病牀に臥し兒は飢に叫ぶ。身を挺して直ちに戎夷に當らんと欲す。今朝の死別と生別とは唯皇天后土の知るあり　雲濱

私は、折に觸れては良寛の脫俗生活に於けるつゝましき其の焚火と、夫の留守をまもつて子等を暖め生かしてゆく雲濱の妻の凛々しき生活との、二つのものを並べて考へ、味ひつきぬ思ひに浸らせられるのである。

（秋島集）

二四　重圍の中に見る日の丸　小林英生

異國で味ふ日の丸の感激には、到底內地生活者の體驗し得ぬ崇高さと深刻さとがある。

小林英生
大阪毎日新聞記者
滋賀縣の人
明治二十五年（一八九二）生

ハルビン　滿洲の北部にある都會

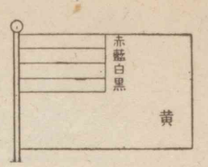
丁超　滿洲匪賊の將

私はこゝ三年をハルビンに送つた。從つてその最後の一年は、あの匪賊討伐の渦中の人となり、しば〳〵生死の境を彷徨うた。「もう駄目だ。」と諦めた事が、幾度あつたか知れない。昭和七年一月、丁超の指揮する大軍のため、ハルビンは完全に取り圍まれ、在留同胞四千は數箇所の避難所に集合し、互に運命に泣きつゝ相抱擁して悲壯な決意をしてゐた。籠城二十日餘、すべてを覺悟してゐる時、思ひがけなくも我等の頭上に、避難所の屋上もすれ〳〵に飛行機が飛來した、眞紅の日の丸を鮮かにその銀翼に輝かせつゝ。

「日本の飛行機だ！　飛行機が來た！　日の丸だ！　日本軍が來るのだ！」と、避難所は、その紅の二つの日の丸に如何ばかり狂喜し、感謝し、感泣したか。兩手を合はせて日の丸機を拜む老人あり、感激に泣く婦女あり、僅か數分間ではあつたが、頭上の日の丸機が旋回する間、在留同胞四千は、兩眼と兩手とを此の二つの日の丸へ集注して我を忘れた。

やがて日の丸は消え去つた。爆音は遠ざかつた。避難所内は俄に感激の後の寂寥やるせなく、みんな再びわつと泣き崩れてしまつたのであつた。

日の丸の飛行機



滿洲國旗

オートバイ
オートバイシクルの略
自動自轉車

最近のハルビンは、もうすつかり日本化してしまつた。到る處に日の丸と五色の滿洲國旗とが飜り、日本の兵隊さんが力强い姿で街を行く。日の丸の自動車、オートバイの交叉、〇〇團司令部などのがつちりした看板。日の丸の威力は、斯くしてまた〻く間に此の北滿の國際都市を風靡してしまつた。日の丸の輝くところから、一切の不安と焦燥とが一掃されてしまつた。しかし匪賊掃蕩前のハルビンは、現在と全く其の趣を異にしてゐた。

回顧すれば、當時の市中は匪賊大集團の襲來の噂が頻りで、市中には益〻不穩の氣が漲つて居り、中華民國人や露西亞人は何れも家々を釘附けにしてしまつた。晝間でさへ街

館—館

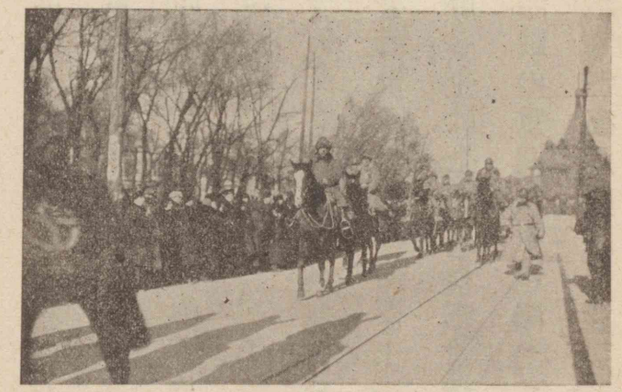
の人通りは杜絶した。南滿への列車が先づ斷絶し、續いて電話もぷつつり切れてしまつた。日本領事館では到頭在留邦人に、數箇所に避難するやう命令を下した。避難所の周圍は、鐵條網と土囊で固められた。持ち寄つた武器を手にして、晝夜交代で男子は何れも自警の役割に就いた。

「今夜は愈〻匪賊が押寄せて來る、燒打ちに來る。」といふ不穩な情報に、神經は彌が上に昂ぶる。流石の花やかな國際都市も、今は全く死の都に變じた。かくして我等は無援孤立、匪賊の重圍の中に陷つて賴り少ない日を送つてゐた。しかも毎夜避難所に設置したラヂオは、「ハルビンとの電信電話杜絶し、在留四千の同胞の運命全く不明となる。」とわれわ

多門○師團　當時の第二師團長多門二郎中將の率ゐたる軍

長春　奉天の東方にあり滿洲國の首府今は新京といふ

れを案じて內地からの聲を送つて來る。內地の人々の同情ある聲を耳にしつゝも「我等は皆こゝに避難して無事です、早く助けに來て下さい。」と言ふ我等の焦燥の念をさへ傳へることが出來ない。片便りしか出來ないラヂオを、四千の同胞は如何ばかり恨めしく思つたことか。



ハルビンにおける皇軍

「いよ〳〵多門○師團は、ハルビン在留同胞保護のため長春を出發します。」といふ聲がラ

一月二十七日
昭和七年（一九三二）

ヂオから漏れた時の一同の歡喜、しかもその歡喜で避難所內が夢中になつてゐる時、忘れ得ない一月二十七日の正午少し前、あの日の丸の飛行機が突如我等の頭上に飛來したのだ。「助けて貰へる。」といふ有難さに泣かない者はなかつた。この日の丸機が飛び來つたばかりで、雲霞の匪賊は蜘蛛の子を散らすが如く逃げ惑ひ、あわてふためいて人家や木蔭に身を隱す。たつた二つの日の丸に、萬をもつて數へる匪賊の大集團も、忽ちその士氣が極度に沮喪した。「今に見ろ、この日の丸が先頭にはためいて、お前達は追拂はれるんだ。」といふ我等の日の丸の威力の發揮を、此の時ぐらゐ有難く感じたことはなかつた。しかし、我等はこの異境での

清水少佐
砲兵少佐
山口縣の人
昭和七年(一九三二)歿

橘　南谿
江戸時代の醫師・文章家
名は春暉
文化二年(一八〇五)歿
年五十三
美濃國大垣
今の岐阜縣大垣市

終生の日の丸の感激に浸る毎に、また胸を刺される歎かはしい思ひ出に泣くのである。それはかの在留四千の同胞に、

「今に日本軍が來るから、もう暫く辛抱せよ。」

と喜びの報を齎してくれた此の感激の日の丸機の操縦者清水少佐が、其の歸途不幸にも敵彈の襲擊に逢ひ、無念を呑みつゝ遂に北滿の露と消えてしまつたことである。

二五　正木段之進

橘　南谿

正木段之進といへるは、美濃國大垣の家中にて歷々の武士なり。此の人劍術の妙を得て、此の門人となる者へは鎖

劍—劍
疊—疊

を授くることなり。京都などにも、此の鎖を傳授せられたる人多し。其の外、江戸などには尤も多く諸國にも門葉多し。此の段之進、劍術の事に就いては、世間色々の奇妙のはなし多くして、信じ難きこともあるに、旅中にて彼の門人に親しく交はりて、其の修行のあらましを聞きしに、誠に感ずべくたふとむべき事あり。

此の段之進の父祖にや有りけん。幼年より劍術に心を寄せ、日夜寢食を忘れて修行せし頃、一夜寢間の襖を鼠の咬む音に目覺めて、疊を叩きて追ひたりしに、鼠逃去れり。暫くして少し寐入らんとする頃、鼠また來りて、襖を咬む。又目覺めて追へば鼠逃去る。心ゆるみて寐入らんとすれば、

鼠襖を咬む。かくのごとくする事三四度に及ぶ。

段之進思ふやう、「われ氣みたずして、彼の鼠に徹せざればこそ、眠るに從うて、鼠の襖を咬るなり」とて、起き直り座を正して一心に氣を集め、鼠の方を守りつめて居たりしに、鼠つひに來らず。其の後は鼠の音する度にかくのごとくするに、鼠咬むことあたはず。後には、桁を走る鼠をも、氣を集めて睨みぬれば落つる程に成れり。今に至り、其の門人氣を練る事を稽古するに、鼠の物を咬むにてためすことありといふ。門人の中にも、二三人はよく鼠を退くる程に至れる人ありとなり。如何なる猛獸といへども、先づ此の方の氣を以て制す。敵人といへども、立向ふより先づ氣を以て勝つ事なりとぞ。此の事は、奇妙のやうに聞ゆれども、さることもあるべしと思ふ。

我が學ぶ所の醫術にも、壓勝の法といふ事ありて、氣を以て禁ずるに、癪氣を開かしめ、或は腫物を押散らし、又は狐狸に魅せらるゝ者を治し、其の外奇效目を驚かす程のこと出來るものなり。其の法、皆正木の修行の如し。又熊澤先生の書き集められし書にも、「敵を討たんとする人の、其の家に忍び入らんとすれば、内に寐入りたる當才の小兒啼出して其の父目を覺す。折惡しと、暫し控へぬれば、小兒もよく寐入りて家内靜かなり。又討入らんとすれば、小兒啼出す。再三かくの如くして、遂に討つ事を得ざりき。是其の殺氣

醫―医

熊澤先生　名は伯繼　蕃山と號す　江戸時代の儒者　元祿四年（一三五一）歿　年七十五

辭―辞

の、無心の小兒に徵せし爲なり。」とあり。其の理の論は格別、先づ正木の修行に心を用ひられし事を感ずべし。

又「彼の鎖所持の者は、いかなる强敵に逢ふ時にも、おくれを取ることなく、又いかなる猛獸・盜賊といへども、此の鎖を所持する人には近づくことあたはず。」と言へり。「是はいかなる事にて、かくは言ふ事なるか。」と、尋ねしに、「何人にもせよ、正木の門人となり鎖を受けんと願ふ時、先づ誓約をなさしむとぞ。其の誓約の辭、君に不忠なるまじ。親に不幸なるまじ。朋友に信を失ふべからず。虛言いふべからず。高慢の心を起すべからず。大酒すべからず。禮儀を失ふべからず。公事にあらずして、みだりに血氣にはやり、夜行す

摩利支尊天　日光を神格化したもの　帝釋天の眷屬　古來武士の守本尊とす

法華經　妙法蓮華經　大乘經典の一

老子　支那周代の哲學者・道家の祖　姓は李、名は耳

べからず。猶ほ此の外數々の條目ありて長し。是に一つもそむくことあらば、摩利支尊天の御罰を蒙りて、武運に盡くべしとなり。初めに、かくのごとく誓ふこと故に、もし此の辭にそむく者は、たとへ鎖幾條所持すといへども、其のしるしなく、鎖の奇特を失ふ。と定めたり。

誠にかくのごとくなれば、正木の誓約いと有難き鎖なり。聖人の道といへども、此の上や有るべき。實に武道の奥義といふべし。法華經の「水火も燒溺する事あたはず。」と說き、老子の「虎豹も、牙を觸るゝ事なし。」と敎へしも、亦是に外ならず。些末の技藝の上にても、其の妙所に至りては、有難きこと多し。されど、余、其の人に交はりて親しく聞きし事なら

ねば、誤り記しし事もあるべきにや。

（東遊記）

二六　梅花の氣品

豐島與志雄
創作家
東京帝國大學講師
慶應義塾大學講師
福岡縣の人
明治二十三年（一八五〇）生

梅花の感じは氣品の感じである。

氣品は一の芳香である。目にも見えず、耳にも聞えない、或風格から發する香である。甘くも、酸くも、辛くもなく、それらのあらゆる刺戟を超越した、えも言はぬ香である。人をして思はず鼻孔をふくらませる無味無臭の香である。それと明かにとらへることは出來ないが、それと明かに感じ識られる一種獨特な香である。どこからともなく、何故ともなく、どこへともなく、自からに發散して漂つてゐる浮游の香である。

それはまた梅花の香である。うつすらと霧こめた未明の微光に、或は寂しい冬日の明るみに、或はわびしい夕べの靄に、或は冷えびえとした夜氣にほのかに織りこまれて、捉へ難く、觸れ難く、たゞ脈脈と漂つてゐる一種獨特な梅花の香は、俗塵を絶した氣品の香である。その香を感じてその花を求めるのは、俗であり、愚である。花の在所を求めないで、漂つて來る芳香に心を澄ます時、人は氣品の本體を識るであらう。

氣品はまた一の凛乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れず、己の力によつて自ら立ち、驕らず、卑下せず、霜雪の

凛―凜

寒さにも自若として、己自身に微笑みかける搖ぎのない氣魄である。肥大でなく、矮小でなく、膨脹せず、萎縮せず、賑かでなく、寂しくなく、唯あるが儘に滿ち足つて空疎を知らず漲溢を知らず、恐れることがなく、蔑むことのない清爽たる氣魄である。

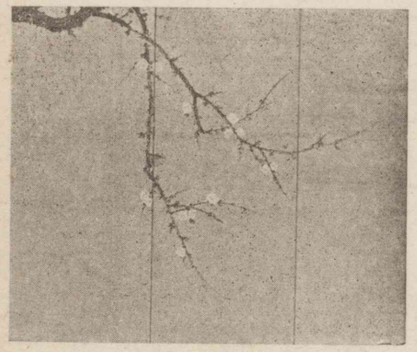
それは又梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁けして微笑み、しかも、驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑やかさもなく、荒寥たる寂しさもなく、ただ靜かに己の分を守つて、寒空の芳香を漂はしてゐる姿は、正に氣品そのものの氣魄である。しみ〴〵と梅花に見入る時、恐怖や、蔑視や、悲哀や、歡喜など、すべて心を亂すやうな情は靜まつて、たゞ氣高い氣品の氣魄に、人は自から打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして、清淨な白色たるべきである。赤や、青や、黃など、何等かの色に染められた氣品は、世に存しない。もとより赤や、青や、黃や、紫など、さういふ色彩が持つことの出來る氣品はあるけれども、氣品そのものの色は、どこまでも白色であらねばならぬ。しかし單に白色だけでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮かな一點の色彩を包んだ純白それが氣品の色である。

こんな氣品の色はまた梅花の色に見られる。黎明や薄

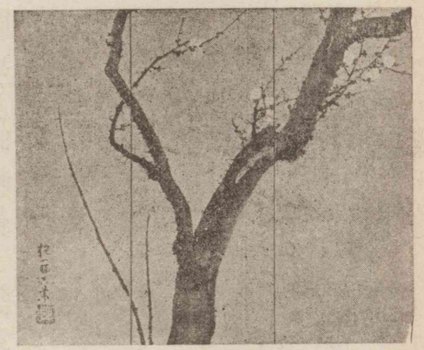
舊—旧

暮の微光の中に浮き出すほの赤いまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮き出すほの蒼いまでの白色、又は月光に照らし出される淡紫に紛ふまでの白色、その白色の花瓣の中に、花粉の黄を小さく點出した色彩は、氣品そのものの色彩である。それに瞳を凝らす時、人は自から心がすがすがしくなつて、氣品の妙趣を悟るであらう。



梅　酒井抱一筆

氣品には一の澁味があり、しかも同時に一つの新鮮味がある。氣品は舊守でもなく、新奇でもない。純粹な氣品は、骨董と新考案を包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とを寄せ集めて、而もその何れでもなく、老と舊の澁味を取り、若と新の新鮮味を取來つた一種恆久性なものである。古さから來る佶屈聱牙と、新しさから來る自由暢達と、兩者を具有して、しつくりと落ち着いたものである。この種の落着きは又梅樹に見られる。鋭角度をなして、ぐい〳〵と曲つた古木から、すいすいと若枝を伸ばし、若きを育てる力を内に藏した老幹と、老



花

いを生かす力で伸び上る若枝が、しつくりと一つの氣分に纏つて、苔むした古い樹皮と、艶々しい新たな樹皮が、一樣に花を咲かせてゐるのは、正に氣品そのものの姿である。老いた枝と若い枝を擇ばずに、一樣に咲き匂つてゐる梅花を眺める時、輕佻と鈍重を超越した氣品の沈靜に、人は自から味到するであらう。

氣品はこの世には稀である。それは地上のものといふよりも、寧ろ多く天上のものである。この地上に在つては、その本來の面目を汚されると言ふのではないが、そこに在るには餘りに淸らか過ぎる。しかし、それを地上に引き下して己が所有としたところに、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂が架け渡した多くの橋梁の中の一つが、そこにあるとも言ふことができる。それ故に氣品は一の抽象であつて、一の具象ではない。隨つて氣品はどんな人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じである。けれども梅花は一の抽象ではなくて、具象である。それゆゑに人に親しまれ難い。餘りに芳しい香を漂はせ、餘りに凛乎たる氣魄を示し、餘りに淸らかな色彩を有し、餘りに妙味のある樹に咲くので、人間離れのした感じを以て人を却(しりぞ)けがちである。しかし、梅花に瞳を定めてその香に心を澄ますことは、必ずしも詩人に取つてばかりではなく普通の人々に取つてもよい。

なぜかといふに、それは地上の息吹に天上の息吹を交へる事だからである。新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむ事は、梅花に人間味が少ないが故に益〻梅花が天上的であるが故に益〻人間に取つてよいのである。

この意味に於て眞に梅花を觀るには、雜沓の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜などに於てよりも、寧ろ自由な、晴々とした境地に於てするのがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の害せられてゐない、のびやかな環境の中に、一本の老木が自然のまゝの枝振に、ぽつりぽつりと花をつけ、ほのかな香を漂はしてゐるのを、少し冷かな二月の夜明、薄霞の晴れやらぬ頃、爽かな空氣を吸ひ、小さな霜柱を蹈みしだいて、ふと氣附いたまゝ何氣なく足を止めて、しみ〴〵と見入り眺め入る心持、それこそ眞に梅花を觀るの境地である。その一本の老樹のたゝずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣は、たゞ一の梅花の氣品となつて人の心に沁み透るであらう。それをも卑俗だといふ者は、卑俗のみを知つて高潔を知らぬ徒輩である。

（旅人の言）

白鳥省吾
詩人
宮城縣の人
明治二十三年（一八九〇）生

二七　百字に映る人生

家庭圓滿　　白鳥省吾

私は、いつも自分の境遇に滿足して、如何なるものにも羨

北越…聯隊所在地越後（新潟縣）新發田町のこと

加治川の長堤の櫻　新潟縣北蒲原郡を流れる川　櫻は長堤十里にわたる

望を感じたことがないが、次のことはある羨望に近いものを感じた例である。

北越の旅で、ある聯隊所在地の驛から、若き一將校が妻と四人の子女を伴うて車室にはいつて來た。地位は佐官、妻は美貌にして健康らしく、子女は十二歳位の女、十歳位の男、八歳位の女、六歳位の男といふ風な、すこぶる惠まれた子福者である。そして、それらの子供は、片手に皆一つづつミルク・キャラメルを持つてゐる。

これは如何にも家庭圓滿の象徴らしく、實に微笑ましい光景であつた。

移りゆく車窓の眺めは深い雪で、折から加治川の長堤にさしかゝれば、川水も凍り、櫻も寒々と裸の枝幹を並べてゐるのが眼に映つた。

外は寒い冬だが、春がやがて來ると思ふと、心は暖かかつた。

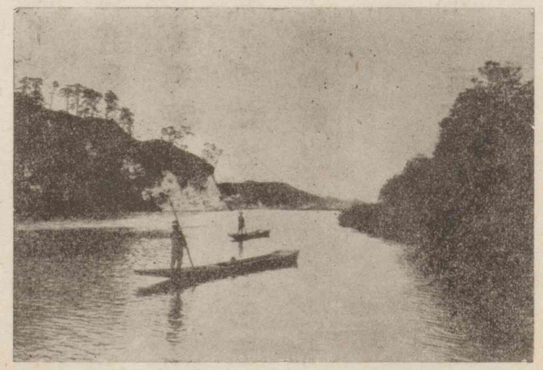
まして、この一幅の生きた「家庭圓滿の圖」には、心が暖かく自から微笑が湧いて來た。

日本三急流　富士川・最上川・球磨川

最上川　山形縣を流るゝ川　流程二一六粁

自然の心

日本三急流の一つである最上川に沿うて汽車が走る。最上川は淺瀬の少ない深い清らかな悠揚たる大河である。



最上川

今上天皇
第百二十四代
御名裕仁（ヒロヒト）
明治三十四年（一八六一）四月二十九日御降誕
昭和元年（一九二六）十二月廿五日御踐祚

芭蕉
江戸時代に出た俳聖
元祿七年（一六九四）歿
年五十一

申すもかしこけれど、今上天皇は御製に

廣き野を流れゆけども最上川
海に入るまで濁らざりけり。（新萬葉集別卷）

と御ほめ遊ばされた。かつて俳人芭蕉の「さみだれをあつめて早し最上川」の句も、他の大河の五月雨の季節に見る、濁流滔々たる盛んなる力をたゝへたのではなく、むしろ五月雨頃にも清く靜かに流れゆく最上川の美をうたつたものであらう。

感覺の美は、同時に人間生活の心を暗示するものである。

「愛の風」の松

「愛の風」といふのは、魔風でも何でもない。越後國高田市

上杉謙信
室町時代末の英雄
本名景虎
天正六年（一五七八）歿
年四十九

ピクニック
郊外散歩旅行

の郊外の山の名である。くはしく言へば、上杉謙信の城趾の春日山の東にある向ひ合ひの山のことである。

愛の風

この山は高田市から四粁ほどなので、小學生や中學生などのピクニックにはもつて來いのところだ。遙かに見える頸城平野や、山脈の展望は實に美しい。またこゝの松林も美しい。

この山のとある廣場に、一抱へに足らぬ松があるが、その松の枝が全部と言つてもよいほど、人間の腕をだらりと下

げたやうになつてゐる。

聞けば、雪の重みで折れ、折れては膠着するためだといふ。常磐の松のかうした根強い力には、或悲壯な精神がある。

雪は毎冬つもる。そして松は毎冬この凍死するやうな寒さと、重壓の中に育つ。虐げられながらも、幾らかづつ伸びる。

それは松林と名のつく、その群生の松どもの知らざる經驗である。

私はこの松を、英雄的な連想で形づけることをやめよう。たゞ事實は事實としてだけでも一つの感激である。

母なる大地

爆彈三勇士
昭和七年二月、廟行鎭激戰の三勇士
久留米工兵部隊の伍長北川丞・江下武次・作江衛之助

神といふ言葉は「我」を沒して人類の愛に死するもの、若しくは超人に與へられた言葉であつた。故に「我」を沒して祖國の愛に殉ずる者は、同樣これを神とするは最も適切なことである。

たとひ一兵卒であつても、それを軍神として讃歎を惜しまぬ我が日本の國民性は美しい。

勇士を花咲く櫻の木に譬へるならば、爆彈三勇士のお母さんや、「一太郎やい」のお母さんは、これを育てた大地——「母なる大地」であらう。

勇士を讃歎すると共に、その人達の母を直ちに聯想し、尊敬し、慰安するところに、溫い家族制度に立脚した日本の國

民性にのみ見られる美がある。

（世間への觸角）

二八　橘　姫

碧瑠璃園

碧瑠璃園　小説家　本名は渡邊勝　又霞亭と號す　名古屋の人　大正十五年（一九二六）歿　年六十二

速風が速風を追つて、船を波頭に打ちつけながら吹荒れた。その度に、どつと波頭から波底へ、舟は木の葉の様に搖れながら打ちおろされた。

船は既に荒狂ふ浪の眞中に漂つてゐた。兵士たちはこの自然の暴力の前に、顏を掩うて倒れてゐた。海に馴れた船夫すら、爲すすべもなく茫然としてゐた。

命は凝然と空の一角を睨んで立つてをられた。しかし、次から次へ吹募る速風は、何時止むとも知られなかつた。

命　日本武尊　景行天皇の皇子

潛―潜

船は幾度も覆るばかり傾いた。命の御頰からは、次第に微笑が影を潛めて行つた。

橘姫をはじめ侍女達の顏には、生きた色もなかつた。船板の一枚に生命を託する運命の前に、泣き叫ぶ女たちの聲が、風の音にとぎれて絶え〳〵に聞えた。

「見苦しい姿を見せまい。波に怖れて見苦しい姿は見せまい。」

橘姫は健氣にもかう言つて、泣き叫ぶ女達を制してゐた。

「姫様、あれ〳〵、怖しい雲の中に、船が、後の船があの様に搖れて見えます。」

「これは神様のお怒りに觸れたのぢや。海神のお怒りに

走—赴

支　走　赴

觸れたのぢや」。

「海神のおたゝりで御座りませうか」。

「おお、海神のお怒りぢや。海神のお怒りぢや」。

その時、橘姫の顔は蒼ざめて、動かし難い決心の色が其所に現はれてゐた。

「さうぢや。御國の爲ぢや。殿下の爲ぢや。この身を海神に捧げ奉つて、一同の危難を救ふのは今ぢや。殿下のお爲に生命を捧げるのは此の時ぢや」。

橘姫はさう心で決すると、殿下の御身近くへ、危く倒れさうになりながら走り寄つた。命は、決意の色をその美しい顔に閃かせて走り寄つた姫を見そなはすと、

「おお、姫、危いぞ。御身は苦しくはないか。今少しの辛抱ぢや。女達はどうした」。

かう言ひながら、縋り着く姫の肩をしつかりと抱かせられた。

「お願ひで御座ります。一期のお願ひで御座ります」。

「一期の願ひぢやと」。

「私は殿下にこの命が捧げたう御座ります。お許しになりませうか」。

橘姫の悲痛な聲が、風にとぎれて命の耳と心とを射る樣に打つた。

「おお、大倭のお爲に」。

命のお顔には、姫の心を射抜いた力強い、しかし、悲しい色が漲りきつてゐた。風ははてしもなく吹荒れた。橘姫の裳裾は舷を越えて散る飛沫に、しつとりと濡れてゐた。姫を抱いた命の腕は、脈々と搏つ姫の眞心が、呼吸と共に傳はつて來るのを感じた。

「殿下、この怖しい速風、この怖しい速風は、きつと海神のたたりで御座りませう。海神のお怒りで御座ります。私はこの身を海神に捧げて、そのお怒りを鎭めようと思ひます」。

その言葉には鐵の様な心が籠められ、火の様な熱情が燃えてゐた。命は荒狂ふ波頭を浴びて、少時じつと考へてゐさ

せられた。

「おお、姫、御身の決心はよう分つた。大倭のお爲ぢや。御身のその堅い決心は、わしの率ゐる一軍を救ふであらう。御身のその生命は、やがて大倭を守るであらう」。

「殿下、お許し下されまするか。この生命を海神に捧げる事をお許し下されまするか」。

橘姫は蹌踉と立上ると、悲しい瞳を上げて懷かしさうに命のお顔を見た。

命の兩眼には、波の飛沫と共に涙が光つてゐた。橘姫は兵士に言ひ附けて菅疊八枚・皮疊八枚・絁疊八枚を波の上に敷かせた。

勾玉

眞嶺さしの歌（古事記）

犧―犧

橘姫は最後の思ひ出に、鏡の前で裝ひを整へた。そして沈んだ光をたゝへた一聯の勾玉を首に掛けた時、侍女の一人は薄桃色の絹布を姫の肩から着せ掛けた。

橘姫はその時、命の御姿をじつと眺めながら、

眞嶺（さね）さし相模の小野（をぬ）に燃ゆる火の
火中に立ちて問ひし君はも。

と歌つた。哀調を帶びた姫の御聲が、風波にとぎれて響いた時、命はじつと眼を閉ぢられた。

橘姫は、その美しい姿を吹雪の如くうち寄せる飛沫の間に進めて、肅然と舷に立つた。この犧牲を一呑に呑まうとする怒濤は、物凄い色をたゝへて迫つて來た。

橘姫

日本國開闢由來記

健氣な橘姫の姿をながめて、女たちは袖を顏に當てたまま、涙聲をふりしぼつた。悲壯な沈默が船の中を、しばらくの間支配してゐた。

その時、橘姫のくれなゐの裳裾が、さつと、波間にひるがへると、姫のすがたは見る見る浪に沈んで、あつと言ふ間に、人々の眼から永久に消えて行つた。

「おお、姫樣、姫樣。」

女たちの泣きくづれる聲が、ふるへて波の間に漂つた。

「姫様の御魂が大倭を救はれるで御座りませう。姫様の眞心は海神のお怒りを鎭めるで御座りませう」。

船夫たちは蘇つた様に立上つて空を仰いだ。兵士たちは再び疲れた身を起した。命は、橘姫の眞心に動かされたまゝ、凝然と波間を見詰めてゐた。命の心には、速風よりも凄まじい姫の悲壯な最期と、最愛の姫の追憶とが過ぎた。

「姫、靜かに眠つてくれ。何事も大倭のお爲ぢや。姫の眞心は、やがて天に通じよう」。

命はその時輕い眩惑を感じられた。

「殿下、あれ、雲が斷たれます。黑雲が斷たれます。西の空には明るい空が破れて見えます」。

船夫の喜びに溢れた聲が、空の一角にとぎれ始めた雲の間から、ほのかに明るみを見出すと、叫ぶ様に發せられた。

おお、雲の切れ目ぢや。橘姫の眞心があの濃い雲を切り裂いたのぢや。海神の怒りは鎭まつた。無事の光がさして來たぞ」。

命は空を仰いでかう言はれた。命の聲に應じて、起る不安から遁れようとする、この怖しい速風から遁れようとする希望の叫びが、次々に傳へられた。

見る中に雲脚は海の面から遠ざかつて、雲の切れ目から現はれた空は、明るいその手を伸ばす様に擴がつて行つた。

「おお、空が晴れる。蒼空が仰がれる。」

「我等の船は神に護られた。尊い姫の御眞心が神に代つて我等の船を護られたのぢや。」

「雲が飛ぶは。雲が飛ぶは。明るい空が擴がつて行くは。」

人々の顏には血の色が蘇つて行つた。

命の心は、次第に地の底に沈んで行く樣に靜かになつて行つた。日の光が、さつと斷雲の隙から、暗い海の面を射た。命の心は喜びと共に哀惜の情に鎖されてゐた。

「殿下、陸が見えます。ああ、陸が見えます。もうひと時の事で御座ります。」

船夫長の高い聲が命の耳に聞えた。

「おお、陸が見えるか。」

命は立上つた。舳の方へ歩いて行つた女達の悲しい咽び泣きの聲が、風にとぎれて聞える。

（物語日本史）

二九　國史に返れ

徳富蘇峰

「國史に返れ」日本國の歷史は大和民族の系圖である、吾人の祖先の考課表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、國史を透して知るより外に方便がない。國史は實に忠實な案內者、信賴すべき指導者である。

吾人は歷史的に考慮せねばならぬ。總べての人類は、平

徳富蘇峰
史學者
文學者
名は猪一郎
貴族院議員
熊本縣の人
文久三年（一八六三）生

等觀よりすれば皆同胞である。併し歴史觀よりすれば、總べての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、さうして丙國と甲國とも亦同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。此の特殊の國性を維持するに於て、始めて獨立國の意義が全うされる。獨立國の本義は形式的に、他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つだけでなく、精神的に自主であらねばならぬ。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は日本の歴史である。此の歴史のうちには、必ずしも悉く皆正しい事・善い事ばかりが滿ちてはゐない。必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべき事ばかりが溢れてはゐない。人間の所作にはさま〴〵な過失もあれば罪惡もある。併し、總括していへば、日本の歴史は決して大和民族の恥辱史ではなく、光榮史である。

如何に日本の皇室が世界に比類のない有難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。如何に日本の國民が、其の一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且つ勇敢であつたかは、國史が其の證人である。如何に大和民族の中に、世界的偉人と比較して一歩も劣らぬ者、即ち彼自身また世界的偉人と稱するに足る者を生じたかは、長い年代の中に屢〻接觸した所である。即ち我が明治天皇の

盛德大業も、國史の背景によつて、始めて明白に、精詳に、剴切にこれを會得することが出來る。國史の背景がなかつたならば、五箇條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。

凡そ固陋・頑冥な戀舊思想や、保守・退嬰な島國根性や、若しくは詭激・狂妄な赤化主義や、架空・浮誇な模倣精神は、何れも我が國史を閑却することから起るのである。現狀を株守するのも國史を知らないがため、現狀に不安を感ずるのも國史を知らないがため、國民的自信力を失墜するのも國史を知らないがため、自惚根性で醉生夢死するのも國史を知

條―条

五箇條の御誓文　明治天皇即位の當時天地神明に誓はせ給へる「廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ」以下五箇條

株守する　宋人田をたがやす者あり。田の中に株あり。兎走りて株に觸れ、頸をくきじて死す。因りて其の耒をすて株を守り、また兎を得んことを冀ふ。兎はまた得べからずして、身は宋國の笑ひとなれり（韓非子）

らないが爲ではないか。

「國史に返れ」とは、「總べての國民が歴史家となれ」と言ふのではない。それには專門の學者がある。たゞ「日本國民として、日本の歴史の大いなる筋道を諒解せよ」といふのである。此の歴史は、精神的に於ける日本の潛在して居る寶藏である。苟も國民的に生活し且つ活動しようとするならば、先づ此の寶藏に向つて總べての物を求めるがよい。

（國民小訓）

寶―宝

昭代女子國文　卷四　終

文部省檢定濟
昭和十三年二月廿二日　高等女學校國語科教科用

昭和十二年八月十九日印刷
昭和十二年八月二十二日發行
昭和十三年二月十二日修正再版印刷
昭和十三年二月十五日修正再版發行

定價　各金六十錢

編者　東京市杉並區西田町一丁目七百七十三番地　金子彦二郎
發行者　東京市神田區神保町一丁目五番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區神保町一丁目五番地　光風館書店
（電話麹町三〇八七番）（振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　大日本印刷株式會社　根本力三

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

廣島縣立可部高等女学校

B組　三十六番

船田百合子

Hiroshima
Kanritu
Kabekoto
Jogakko

Hroo

Funada
Yuriko